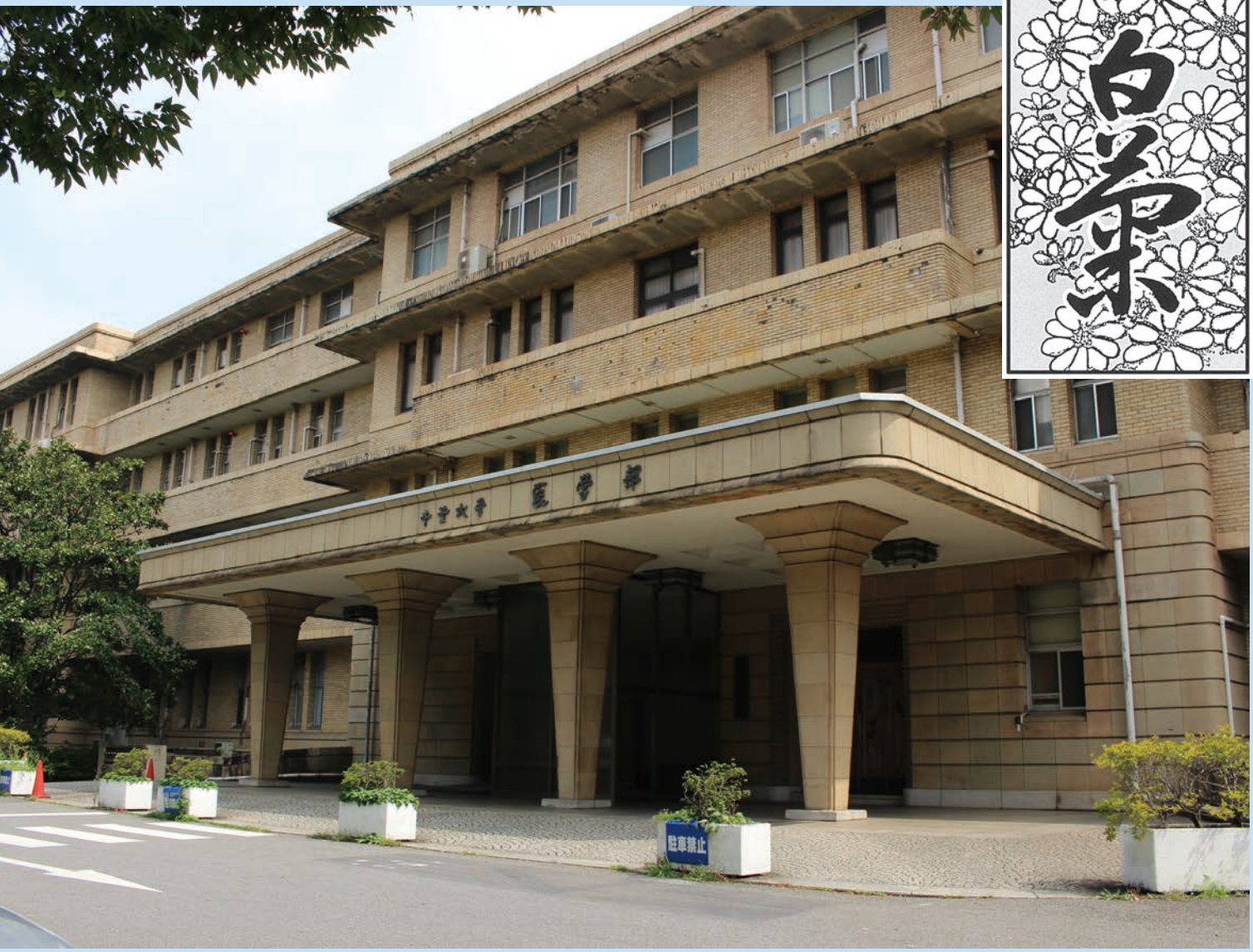
千葉白菊会50周年記念号

式典会場ゐのはな記念講堂は感謝と感動に包まれた



通巻53号

平成28年12月21日発行

目次

巻頭言　会長　大澤　國昭 …… 1

千葉白菊会五十周年記念式典 …… 2
千葉大学長祝辞　徳久　剛史
千葉県知事祝辞　森田　健作
千葉県医師会長祝辞　田畑陽一郎
医学部長挨拶　中山　俊憲
会長挨拶　大澤　國昭
学生代表　感謝の言葉　久保田姫子

千葉白菊会五十年の歩み …… 9
初代会長を偲んで　山内　實
設立五十周年に寄せて　山内　明子
悲願の献体の碑建立　丸山　武文

献体の碑だより …… 13

成願者名簿 …… 14

千葉白菊会五十周年記念講演 …… 16
要介護になる前に
―足腰が弱るロコモの話―　高橋　和久

生命の尊厳を守り医師の心を育てるために …… 23
千葉大学解剖学教室の取り組み　森　千里

解剖実習感想文 …… 25
医学部　石川凛太郎　岩井　沙椰　金子　侑暉
高橋誠志郎　安藤　英俊　瀧口　翔太
菅原ゆたか　星　佳佑　結城　駿
磯部　琴絵　土屋　太一
ケイランディッシュ　フォアド
町田　蓉子　依田　夏美　野田万里子
医学薬学府　佐久間千愛　岡本　洋子　中嶋　隆裕
看護学研究科　本谷由香里　金井　友佳　小村　文乃

献体の精神が生きる先進解剖学教育の取り組み …… 42
進化し続ける解剖学教室　鈴木　崇根
医師感想文　細川　郁　對比地加奈子　及川　泰宏
遺体からの感染を防ぐ取り組みについて　鈴木　都

グラビア特集 …… 48
解剖慰霊祭・感謝状伝達式・遺骨返還式
第三十五回総会・五十周年記念式典

千葉白菊会この一年の活動 …… 54
学生との懇談会開催
篤志献体全国連合会総会参加
第三十五回千葉白菊会総会開催
マスターコースガイダンス参加
解剖実習ガイダンス参加

役員紹介 …… 55

寄付者名簿 …… 56

事業・会計報告 …… 57

白菊の広場 …… 62
真野　美晴　上原　幸子　眞瀬　次代　山本とみ子

ご遺体をお迎えの際にご留意いただきたいこと　松野　義晴 …… 63

総会案内・お知らせ …… 64

ご家族の方々へ

巻頭言

私たちの千葉白菊会が、白菊会千葉支部として一九六六年（昭和四十一年）に発足してから五十周年を迎え、この度の会報は、五十周年記念号として発行することになりました。

この半世紀、当初は献体者の確保に、解剖学教室と共に県内を巡るなど、千葉白菊会としても大変な苦労がありましたが、今では大学からのあらゆるご要望にお応えできるまでに発展致しました。

これは困難な時期にお支え下さったご関係の方々をはじめ、変わらぬご協力を賜っている大学内外のご関係者、そして現在会員として当会に属しておられる皆様方のお陰であると、心より御礼申し上げる次第です。

その記念式典が去る六月二十八日、県や市など行政機関や県医師会からの代表者をはじめ千葉大学関係者など多くのご来賓のご臨席を頂き、千葉大学ゐのはな記念講堂で、医学部の絶大なるご支援により挙行されました。

式典の中ではご関係の皆さまから心温まるご祝辞を頂き、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

また私たちの純粋な献体の精神に応えるために、解剖学教室が取組んでいる千葉大方式と言われる先進的な数々の活動の概要説明がなされ、ご臨席の皆さまに改めてお伝えできたことは、大変良かったと感謝いたしております。

良き医療人育成のために

千葉白菊会
会長　大澤　國昭

千葉白菊会の活動は、あくまでも千葉大学医学部・医学研究院の医師の教育・研究の発展に繋がるためのものでありますが、私たちは献体解剖によって単に知識習得や手技向上に役立つだけでなく、真に優れた医学・医療人になって頂くための人間的成長に資するものであってほしいと願っております。

そこで、解剖実習が始まる前には、私たちの献体動機をお話ししたり、実習終了後の学生との懇談会では、彼らの苦労話を聞きながら、私たち高齢者の体験談をお話しすること等を通じて、若者たちの人間としての心の成長に少しでもお役に立つべく努めております。

私たちは千葉白菊会設立五十周年の記念すべき時に当たり、「医は仁術なり」という言葉が、少なくとも千葉大学医学部においては死語になってもらいたくないと改めて思っております。

そのために私たちも「知識は豊富で、腕も良く、思いやりのある」真の良き医学・医療人の育成に微力を尽くすべく、解剖学教室はもとより皆さまのご協力を得ながら、これからより一層誠実に取組んでいきたいと、思いを新たにしているところであります。

医学部キャンパスの春
（アミガサユリ）

千葉白菊会設立50周年記念式典

感謝と感動に包まれたゐのはな記念講堂

平成二十八年六月二十八日。この日は千葉白菊会にとって、文字通り忘れられないメモリアルデイとなりました。昭和四十一年の発足以来半世紀を祝う、五十周年記念式典が盛大に執り行われました。会場となった千葉大学ゐのはな記念講堂では各界の来賓をはじめ、白菊会会員とその同伴者、さらには医学部学生や大学関係者、ボランティアのみなさんを含めおよそ四百人がご来場されました。

司会者の発声による献体成願者への黙とうを皮切りに、ご来賓のあたたかい祝辞や学生代表の真情溢れる謝辞など、会場は終始、感謝と感動に包まれました。さらに「要介護になる前に～足腰が弱るロコモの話～」と題した高橋和久先生の記念講演は高い関心を呼びました。

献体成願者への黙とう

祝辞

尊い志に心からの敬意と感謝を

千葉大学長
徳久　剛史

千葉白菊会の設立五十周年を心よりお祝い申し上げます。千葉白菊会の皆さまには、これまで五十年の長きにわたり千葉大学医学部の学生教育に対して多大なご支援をいただき深く感謝申し上げます。

近年における医学・医療の進歩は著しいものがあります。特に分子生物学の進歩により、これまで原因不明であった疾患の発症機序※が遺伝子レベルで明らかにされるようになってきています。その結果、これまで不治の病とされていた「がん」や「リウマチ」などの疾患にも新しい治療法が次々と開発されて来ています。しかしながら、今なお多くの方々が治療法の確立されていない疾病に苦しんでいるのも事実であります。

そのため医師の養成には、最先端の医学・医療の知識を教授することは当然のことととして、深い人間愛に基づく生命の尊厳と医の倫理を教授することが非常に大切となります。この医師養成の原点に沿って千葉大学医学部では、病める方々の苦しみを理解できる医療人の育成を基本として、種々の疾病の新しい治療法の開発を目指す優れた医学研究者や臨床研究者の育成に向けた医学教育を継続してきております。

この医学教育において解剖学実習は、最も基礎的でありかつ重要な教育科目となっています。医学生は解剖学実習により複雑な人体の構造とそのバリエーションを学ぶとともに、教科書からは決して得られない「生命の尊厳」や「医師としての使命感」を深く心に刻み込むことになります。

私事になりますが、私も今から四十五年前に行いました解剖学実習でご遺体と向かい合いました時の厳かな緊張感と責任感を、昨日の事のように思い出すことが出来ます。そして、その解剖学実習でご遺体を前にして感じた医師としての使命感が、その後の私の医学研究者としての精神的な原点になっております。

また、近年では医師とともに薬剤師や看護師を含む医療人の養成にむけた専門職連携教育（ＩＰＥ：Interprofessional Education）が盛んになっております。将来は医療機関で医師と一緒に診療活動に従事することになる薬学部や看護学部の学生たちにも、ＩＰＥの一環として解剖学実習を見学するようにさせていただいております。改めて、千葉大学の医療人養成におけるご支援に深く感謝申し上げます。

人生の最期の締めくくりとして解剖献体に自らを捧げると決意されたみなさまの尊い志に、心からの敬意とともに感謝の意をお伝え申し上げて、千葉白菊会設立五十周年の祝辞と致します。

※発症機序：病気になるメカニズム

祝辞

県民の大切な命・健康を守る

千葉県知事
森田　健作

このたび、千葉白菊会が設立から五十周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

また、昭和四十一年の設立以来、長きにわたり、二千百名を超える会員の方々が、医学の発展に寄与するため、篤志献体という尊い行いをされてこられましたことに深く敬意を表します。

現在、千葉白菊会には二千名近い会員がいらっしゃるとのことであり、これは、千葉白菊会の崇高な理念が、多くの県民に理解されていることの表れであろうと推察いたします。

そして、会員の皆様の尊い志により、献体による解剖実習を学んだ千葉大学の医学生の多くが、千葉県内で医師となり、御活躍されていることを、大変心強く思います。

千葉県では、いわゆる「団塊の世代」が後期高齢者となる平成三十七年に、七十五歳以上の人口が百万人を超えることが予測されており、今後、医療・介護サービスのニーズの増大が見込まれます。これに対応するため、安全で質の高い医療・介護サービスが受けられる体制を構築していくことが求められています。

こうした中、県では、平成三十七年に向けて、地域医療体制の整備を図るとともに、これを支える医療・介護人材の育成と確保等に取り組んでおります。

県民の皆様が「千葉で生まれて、住んで、働けてよかった」と誇りに思える「くらし満足度日本一」の実現に向けて、「県民の皆様の大切な命・健康を守る」ことを第一に、県民の皆様とのチームスピリットの下、一丸となっての取り組みを、より一層推進してまいります。

結びに、五十周年を契機に千葉白菊会のますますの御発展を祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

五十周年記念式典ご来賓

徳久　剛史（千葉大学長）
古元　重和（千葉県知事森田健作氏代理）
田畑陽一郎（千葉県医師会会長）
岡田　啓明（千葉市長熊谷俊人氏代理）
済陽　高穂（ゐのはな同窓会会長）
橘川　嘉夫（千葉大学医学部後援会副会長）
林　静誠（千葉県アイバンク協会常務理事）
松野　義晴（国際医療福祉大学基礎医学研究センター教授）
山本　修一（千葉大学医学部附属病院長）
齊藤　和季（千葉大学大学院薬学研究院長）
宮﨑美砂子（千葉大学大学院看護学研究科長）
渡邊　栄人（千葉大学事務局付課長（基金担当））
中山　俊憲（千葉大学医学部長）
森　千里（千葉大学大学院医学研究院環境生命医学教授）
山口　淳（千葉大学大学院医学研究院神経生物学准教授）
伊藤　千鶴（千葉大学大学院医学研究院生殖生物医学講師）
丸山　武文（千葉白菊会前会長）
野田　和宏（千葉大学医学部事務長）

祝辞

更なる医療の発展に尽力

千葉県医師会
会長　田畑 陽一郎

この度、千葉白菊会が設立五十周年を迎えられ、本日記念式典が開催されるにあたり、千葉県医師会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

貴会は千葉大学医学部へ献体を支える団体として設立され、以来五十年間にわたり医学教育の発展にご尽力をいただいておりますことに、深く敬意を表しますとともに感謝申し上げます。

現在、我が国は少子高齢化の進展により、総人口が減少傾向にあり、一方で七十五歳以上の人口は大幅に増加しております。千葉県においても高齢化率は二〇二五年に三十％に達することが見込まれており、今後地域包括ケアシステム構築並びに全世代に対応した社会保障制度の構築が喫緊の課題となっております。

一方、ＷＨＯが発表した世界保健統計によると二〇一五年の日本人の平均寿命は八十三・七歳で世界一となっており、統計を遡ることが出来る二十年前より世界一の座を守り続けております。また、新生児、乳幼児の死亡率の低さも世界一となっております。

これは我が国の医療保険制度、すなわち国民皆保険、フリーアクセス、出来高払いが堅持されており、そして安全で安心、質の高い医療が提供されていることを証明するものであります。このことは、医学教育における高い水準が確保され、継続されていることを如実に物語っております。

医学教育の中でも、特に正常な人体構造を十分に理解することが基礎となり、人体解剖による実習が不可欠であります。過去においては実習に必要なご遺体が不足する時代があり、医学教育に寄与すべきとの志の下に献体運動が始まりました。現在では、医学生の教育のみならず臨床医の解剖実習にも活用されており、医療技術の向上に多大な貢献を果たされております。

今日の医学、医療の発展は、自ら献体をご決意いただいた故人の方々、崇高なご遺志を尊重して同意いただいたご遺族の方々のご理解に支えられております。私たち医療関係者は、献体された多くの方々、ご遺族のお志を糧として、更なる医療の発展に尽力することを改めて決意するものであります。

最後に、千葉白菊会の今後益々のご発展並びに役員、関係者の皆様方のご健勝を心より祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

医学部キャンパスの夏
（ノアザミ）

高度な知識と技術を兼ね備えた心優しき医療人を！

私たちがお医者さんにかかるとき、だれでも一番に願うのが「患者の身になって話を聞いてほしい」ということ。千葉大医学部では、そんな願いに応える高度な知識と技術を兼ね備えた心優しき医療人が続々と輩出しています。50周年記念式典でも、私たちの無条件・無報酬の献体が果たす役割と、医学生たちが日々大きく成長していく願いを込めた祝辞などが寄せられました。

挨拶

三つの誓い

千葉白菊会
会長　大澤　國昭

本日は、何かとご多忙のところ、ご来賓の皆さま、そして千葉大学のご関係の皆さま方には、本席にご臨席頂きまして心より厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

ご案内申し上げたとおり、私ども千葉白菊会は、千葉大学医学部への献体をお助けする団体として、一九六六年・昭和四十一年に白菊会千葉支部として発足して、今年が丁度五十周年の節目の年に当ります。

当初、献体登録は十一人と解剖すべきご遺体の確保に大変なご苦労があったとお聞きしておりますが、現在は、既に亡くなってしまっている会員さんなど、実態に合った登録数の見直しを行いつつ、それでも登録者は二千人前後をキープし、解剖学教室からの数々の新しいチャレンジにも積極的にお応えし、その活動は全国の白菊会の中でも注目される存在に成長しております。

これは偏にご臨席の皆さま方からの、「献体の精神」への深いご理解のもと、当白菊会へ変わらぬご支援を頂いている賜であり、重

挨拶

献体の力は絶大

千葉大学医学部長
中山　俊憲

千葉白菊会設立五十周年記念式典にあたり、千葉大学医学部を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

千葉白菊会の設立以来半世紀にわたり、会員の皆様には、千葉大学医学部の学生教育および医師への教育・研究への献体活動にご尽力いただきまして、誠にありがとうございます。大澤会長をはじめ、会員の皆様の尊いお気持ちに感謝申し上げ、千葉大学医学部教職員一同、厚く御礼申し上げます。

医師を目指す学生にとって、肉眼解剖は単に解剖学の医学的知識を修得する面のみでなく、生命の尊厳を知るという、何物にも替えがたい精神的な教育を受ける意義もあります。この崇高な気持ちで献体に向き合うことで、解剖実習を終えた学生たちが人間的な成長を遂げていきます。そして、この学生たちが、数年後に豊かな人間性を持つ心優しい医師になります。将来、彼らが更なる精進を積み、高度な知識と技術を兼ね備えて、献体をしてくださいました方々のご恩に報いることができることを願ってやみません。

また、医師の教育・研究のためにもたくさんの会員の皆様にご賛同ご同意をいただいております。急速に進歩していく医療技術を確実に身に着けていくために、献体の持つ力は絶大です。医師の手術手技の向上や新たな治療法の開発などが、千葉大学医学部附属病院のみならず日本・世界の「医療の質」の向上につながるものと信じております。

さきほど千葉白菊会設立五十周年の記念品としてご寄付いただきました素晴らしい「画像供覧システム」につきましても、解剖学教育の更なる発展のため活用させていただきます。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、ご献体いただいた方々のご遺志に応えるべく、千葉大学医学部は優秀な、そして心優しい医療人を育てて参ることをお約束いたします。

本日、千葉白菊会設立五十周年記念式典にご参集の皆様のご健勝と、千葉白菊会の今後ますますのご発展をお祈りし、私の挨拶とさせていただきます。

ねて厚く御礼申し上げる次第でございます。

次に、この記念すべき時に当たり、私たちがなすべきことを、三点に絞って述べさせていただきます。

まず、私たちはあくまでも「無条件・無報酬の献体の精神」のもとに、これからも積極的に献体登録活動を進めて参ります。

二つ目は，折角一大決心をし家族の同意も得て献体登録をしたのに、家族との連絡が悪く、亡くなって全て終わった後に、献体していたことを遺族が気付いた…といった悲しい事態にならぬよう、あらゆる機会をとらえて、連絡カードの配布など献体意思の伝達促進に努めたいと思っております。三つ目は、解剖実習に当たる学生さんたちなどに、私たちの献体動機を披歴したり、懇談会などで高齢者としての貴重な体験を話すことによって、若者たちの人間としての成長に少しでも貢献したいという事です。これは、人間は経済的な損得だけでは真の幸せや喜びは得られないことを、少しでも伝えられたらと願うからです。

以上のような基本姿勢で、私たちは何よりも感謝の気持を大切に、これからも誠心誠意努めてまいりますので、何卒皆様方には今まで以上の温かいご理解とご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

学生代表
感謝のことば

私たちは決して忘れません

千葉大学医学部三年　久保田姫子

初めに、私たちの肉眼解剖実習が今年の二月十九日の納棺式をもちまして、無事に終了することができましたことをご報告致します。白菊の花ことば、献身・誠実のままに、ご献体くださった故人の方々、ご遺族の方々、白菊会会員の皆様に、千葉大学医学部三年を代表いたしまして、厚く御礼申し上げます。

私たち医学生にとって、肉眼解剖実習は特別な意味を持つものです。初日のガイダンスにおいて、大澤会長が『非日常的な日々』と表現していらっしゃいましたが、実習中の生活はほんとうにその通りでした。実習を終えて大学を出る頃には、すっかり日が暮れており、家にたどり着けば、次回の予習に追われました。毎日が、他の何よりも解剖について考える日々でした。

今でも、少し不安な気持ちでご遺体の眠る解剖実習室に初めて入った日のことをよく覚えています。ご遺体の先生にお会いしたとき、先生はいったいどのような思いでここにいらっしゃるのだろうかと、しばし思いを巡らせました。私はお顔を拝見しながら、「人生の最後に医学に役立てて欲しい」という強い意志を先生から感じ取りました。先生の思いを無駄にせず、これからの実習でできる限り多くのことを学ぼうと決意したことで、それまで感じていた不安が吹き飛んだような気がしました。

私たちは新しいカリキュラムのもとで、それまでの三年生春から、二年生冬に解剖実習が早まりました。専門知識が乏しい状態で実習を行うことへの不安と、今までよりも早い時期から実習ができることへの期待が入り混じった気持ちで実習に臨みました。そして今振り返ると、解剖実習によって医学の基盤となる知識を得たのみならず、日々予習復習を怠らないこと、班のメンバーと協力すること、人体は個人差が大きく、教科書通りでは無いことなど、様々なものを得ることができたと思います。

三ヶ月に及んだ実習の最終日、全員で納棺式を行いました。お世話になったご遺体の先生を棺に納め、献花をし、最後の黙祷をした際には、様々な思いが胸を駆け巡りました。そして、長い間ご遺体の先生のお帰りを待っていらっしゃったご遺族のもとに帰られるのだと思うと、改めて、深い、深い感謝の気持ちが心の奥からわき上がってきました。非常に多くのことを教えてくださったご遺体の先生のお顔を、私たちは決して忘れません。

私たちが、ご遺体の先生にできる唯一の恩返しは、立派な医師になることだけです。今後、多くの講義に真剣に取り組み、さらに医師になってからも真摯に学び続けることによって、この感謝の気持ちを示していきたいと思います。

最後になりましたが、この度五十周年を迎えられました千葉白菊会の益々のご発展と、千葉白菊会会員の皆様のご健康をお祈りし、御礼の言葉と代えさせて頂きます。

献体の精神を広め続けた五十年の歩み

千葉白菊会総会にて（S62.10.17）　右端が齋藤利一初代会長

千葉白菊会というのは

医学・医療の教育・研究のために、「無条件・無報酬」で、自分の遺体を千葉大学医学部にあずけることを約束したボランティアの団体です。

この会にお入りになっても何の特典もありません。強いて申せば「灰になる前に医学のお役に立つ」という生前の「よろこびを生きがいとする」ことです。

これは齋藤利一初代会長が名刺の裏に書かれていた言葉です。千葉白菊会の歴史は齋藤会長を抜きには語れません。献体登録組織を立ち上げ、白菊会千葉市部長・千葉白菊会会長として三十年の長きに亘り会務を一手に引き受け、献体の不足している時代にあっても「無条件・無報酬」の理念を貫き通しました。

山内彰吉二代会長は途絶えていた会報を復刊し、それは今に続いています。丸山武文三代会長は、精力的な活動で念願の「献体の碑」建立を果たしました。

初代会長齋藤利一氏を偲んで

千葉白菊会元副会長
山内　實

千葉白菊会結成当初からの齋藤利一会長のご尽力については、ここに表現することは到底適わぬものでありますが、会長の献体活動への思いの端緒や献身的な献体活動を中心に、職場でのご様子などをご紹介いたしまして、ここに千葉白菊会五十周年の輝かしい歴史の基礎を築き上げられた、齋藤利一初代会長のご尽力とご功績に、改めて深い敬意と感謝の心をお捧げしたいと思います。

齋藤会長の献体活動へのきっかけは、旧陸軍歩兵隊の幹部候補生試験合格後の身体検査の時に肺結核の発症が発見されて、旧陸軍千葉病院（現国立病院千葉医療センター）に入院したことに遡ります。

この入院療養中に足繁く見舞われた女性がおられたのですが、その後この方と結婚され、退院後の献身的な療養介護もこの方によって受けられたのです。

その後、お二人に第一子が恵まれたのですが、ご出産の折に子癇による全身痙攣にみまわれ、不幸にもお子様は亡くなってしまわれたのであります。その上に奥様も全身不自由の状態になったのですが、医学の力によってどうにか死を免れ、生命を保つことができたのであります。

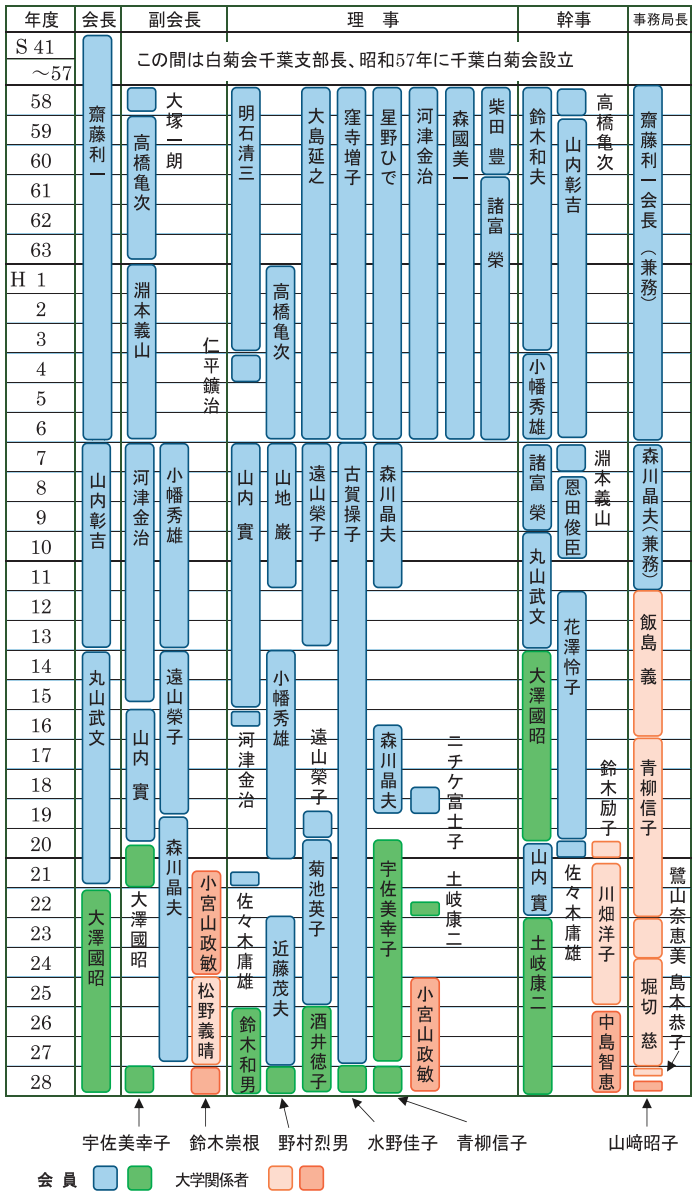
その時、齋藤会長は愛妻が命永らえられたことに感動・感謝し、今後自分は医学の発展のために尽すことを決意されたのであります。そしてその一環として医学生の教育、就中、その基本となる人体解剖の重要性を痛感し、献体啓発活動に注力することを決断されたのであります。

当時、まだ献体に対する理解者は少なく、この状況を憂慮された齋藤会長は、勤務に加えて妻の介護と本当に厳しい生活環境に中にあって、休日を利用して大学の先生方と共に県下の市町村役場への啓発活動や老人ホーム等の訪問と、実に昼夜を分かたぬ献体啓発募集活動に没頭されたのであります。

当時、白菊会の事務所は医学部四階に在ったのですが、和文タイプライターを置かれ、自宅にも一台置いて事務処理をされ、特に啓蒙訪問をした先には、即日毛筆で礼状を認められておられました。

また会員への思いやり・愛情は深く、特に健康への気遣いは人一倍で、疾病者の居ない健やかな家庭作りのためにと、先生方に生涯健康で過ごせる健康管理についてご講演をお願いされ、昭和五十六年の総会時に第一回の衛生講話を入れて、

千葉白菊会歴代役員一覧表



千葉白菊会事務局開設記念（S58.2.9）
左から　森國美一理事、大島延之理事、永野俊雄教授
齋藤利一会長、嶋田裕教授、窪寺増子理事、高橋亀次理事

これを　小冊子に編集され会員の手元にお届けし、現在の総会時の講演、その内容の会報掲載に繋がっているのであります。

職場に在っては、陸上自衛隊高射学校教務課で予算策定・執行を担当され、特に節約精神の徹底に気を配られ、鉛筆一本についても短く完全に使用不能になったもののみ交換交付するなど、経費節減を徹底されました。偶々、昭和四十一年三月に私が転任して同じ職場でご一緒させて頂いたのですが、二人三脚で良きご指導を頂き心から感謝しております。

会長を偲ぶに尽きぬものがありますが、会長が遺された「無条件・無報酬」の献体の基本精神が、これからも千葉白菊会の揺るがぬ基盤として脈々と引き継がれていくことを心から祈念しております。

医学部キャンパスの冬
（ロウバイ）

千葉白菊会設立五十周年に寄せて

千葉白菊会二代会長
故山内彰吉氏夫人
山内　明子

このたびは千葉白菊会設立五十周年を記念された記念式典・講演会が盛大に行われましたこと、真に嬉しく心よりお喜び申し上げます。

主人も天国でどんなにか喜んでいることでしょう。早いもので主人が献体成願して三年になります。大学の霊安室で遺体を引き取っていただいた時、私たち親族と現白菊会の大澤國昭会長をはじめ大学関係者の方々が立ち会ってくださったあの日のことが、昨日のことのように思い出されます。

主人が白菊会に入会するに際し、私に「自分も戦地に行ったが、戦友の多くは命を落とした。だからその人達の為にも死して医学のお役に立つ『献体の会』に入りたい。」と申しました。

主人は入会後、白菊会の役員（監事）となり、初代会長齋藤利一様の急逝により二代会長に就いて七年間会長を務め、また全国献体団体の理事も務めるなど、一生懸命努力し白菊会の為に働いていた姿を見ておりました。

今回、五十周年を迎えられた千葉白菊会の発展に、主人が少しでもお役に立てたことを、私も誇りに思っております。主人も天上から千葉白菊会が千葉大学医学部の教育・研究に益々貢献することはもとより、日本の医学発展のためにも先駆的役割を果たされますのを願っていることと思います。

篤志解剖全国連合会総会にて（H11.3.28）
左から森川晶夫理事(兼事務局長)、遠山榮子理事
山内彰吉会長、古賀操子理事、小幡秀雄副会長

悲願の「献体の碑」建立

千葉白菊会三代会長
丸山　武文

医学部の正門を入ると、目の前の林の中に千葉白菊会の「献体の碑」があります。建立日は平成十六年（二〇〇四年）十二月二十一日（火）、冬至の日でした。

晴れわたった好天に恵まれ、除幕式には森千里教授をはじめ大学関係者、白菊会役員、医学部学生など百二十名が参列し、盛大に行われました。この時の状況は千葉白菊会会報（通巻35号・復刊19号載）で、会員の皆さんにお知らせしました。

「献体の碑」除幕式（H16.12.21）
左　丸山武文会長、右　森千里教授

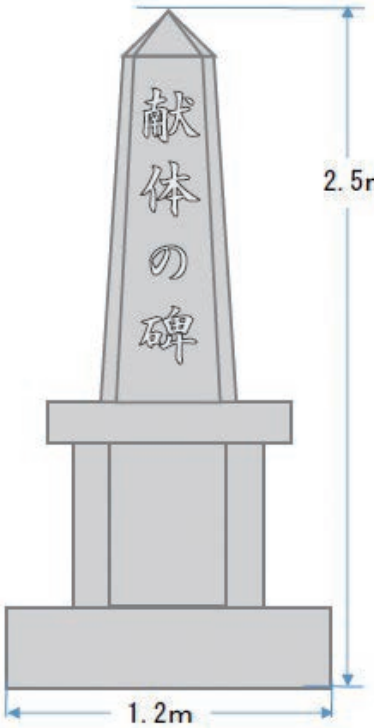
実は私は四国徳島県の出身で、祖父・父とも徳島大学医学部の徳大白菊会々員でした。このことは祖父が死亡した時にはじめて知ったのです。祖父は昭和四十三年、私が結婚した年の八月、徳大白菊会第一号の献体者、父は昭和四十八年の第十六号の献体者であります。

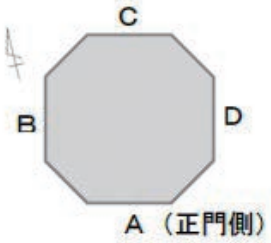
ですから人間は死亡しても医学の為に役立つのだと、祖父と父から教えられていたので、白菊会に入会する考えは若い時から持っておりましたが、会社勤めの関係で、千葉白菊会へ入会したのは平成十年になりました。

平成十四年に千葉白菊会三代会長を山内彰吉二代会長から引き継ぐことになり、その引き継ぎに際し山内会長から初代会長の齋藤利一氏も「献体の碑」建立を検討していたので、ぜひ早急に実現するよう強い要望があったのです。

そこで、毎年開催される篤志献体団体全国大会に出席したときには、他大学の役員の方々にもご意見を聞き、いろいろとお教えを頂いたことを参考にし、基本的な取組み方として、次の事項を役員会で検討することになりました。

1　碑のデザイン・大きさ、
2　刻字内容
3　必要費用
4　建立時期
5　建立場所





A　献体の碑
B　献体の心　無条件・無報酬
C　千葉白菊会　建立日　平成十六年十二月二十一日
D　白菊の花ことば　献身・誠実

これらについて千葉大学の絶大なご協力を得ながら、幾度も協議を重ねて実施案をまとめていったわけですが、特に、建立場所に関しては、白菊会々員や学生の皆さんが学校生活の中で常に目につき易い場所にしたいと、森教授にお願いをし教授会で承認を頂き、現在のあの場所に決まったことは、私たちの大きな喜びでありました。そして碑の左右側面に「献体の心：無条件・無報酬」「白菊の花ことば：献身・誠実」を刻字した高さ二メーター五十センチの立派な「献体の碑」が完成したのです。

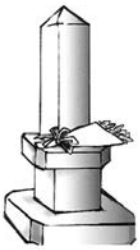
碑周辺の整備・清掃を当時役員でした森川晶夫氏に管理責任者になって頂き、定期的に管理・清掃に尽力して頂きました。今では大学の方でも積極的に清掃して頂いており感謝に堪えません。

現在、公式な行事としては、千葉白菊会定時総会時の直近一年間の献体者名簿の奉納式、医学生の解剖学講座修了時の献花式、そして毎年一月初めの森教授など解剖学教室の皆さんと白菊会役員による年頭の献花式が、この「献体の碑」の前で行われております。

「献体の碑」の傍らに当時准教授でした門田朋子氏寄贈の蝋梅（ろうばい）が植樹されており、時期が来ると芳香馥郁（ほうこうふくいく）と訪れる人を楽しませております。私も月に一度は碑に逢いに行きますが、花束を携えて来られた遺族と思われる方や、この林を通って食堂に通う学生や職員の方たちが、時々碑に頭を垂れる姿を見ることがあります。そんな時これも「献体の碑」を建立した大きな意義かと心が温かくなります。

献体は医学の為に〝無条件・無報酬〟で我が身を大学に引き取って頂くだけです。その心を具現化したのが「献体の碑」であると私は思っております。

献体者名簿奉納式（H17.10.14）
役員の見守る中、名簿を奉納する丸山会長



献体の碑だより

◎一月六日　環境生命医学による新春の献花式が行われ、千葉白菊会からは大澤会長他三名が参加しました。

◎二月十九日　解剖実習の納棺式を終えた医学部二年生が献体の碑に集合し、森教授の献花に合わせ、感謝の拝礼を行いました。

◎十月十四日　今年の名簿奉納式は予定されていた総会・五十周年記念式典、医学部解剖慰霊祭両日とも雨で順延の為、解剖実習ガイダンス終了後になりました。学生が初めての解剖実習を行っている中、白菊会役員八名が心を込めて名簿を奉納しました。

名簿奉納者数　二千百七十六名

金木犀の香漂う碑周辺

成願者名簿

平成二十七年十月一日から平成二十八年九月三十日までに八十八名の会員が成願されました。
謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

故 河津 金治 様 平成二十七年十月三日 千葉市中央区 96才
故 津川 つね 様 平成二十七年十月十一日 長生郡睦沢町 98才
故 髙橋 惇 様 平成二十七年十月十二日 柏市 95才
故 齋藤 述 様 平成二十七年十月十六日 市川市 96才
故 熊川 麗二 様 平成二十七年十月二十二日 松戸市 84才
故 大嶋 央行 様 平成二十七年十月二十七日 佐倉市 85才
故 木村 三郎 様 平成二十七年十月二十八日 旭市 79才
故 鈴木 林子 様 平成二十七年十一月一日 千葉市若葉区 100才
故 野田 英子 様 平成二十七年十一月十日 佐倉市 94才
故 諏訪 克彦 様 平成二十七年十一月十四日 船橋市 73才
故 浅田 澄明 様 平成二十七年十一月十七日 千葉市稲毛区 95才
故 伊藤 時也 様 平成二十七年十一月二十日 船橋市 82才
故 髙瀬 たけ 様 平成二十七年十二月二日 鎌ケ谷市 85才

故 岩立 正 様 平成二十七年十二月九日 八街市 101才
故 町田 弘興 様 平成二十七年十二月十六日 流山市 88才
故 伊藤 久子 様 平成二十七年十二月二十日 茂原市 85才
故 小林 キミ 様 平成二十七年十二月二十二日 船橋市 93才
故 武田千枝子 様 平成二十七年十二月三十日 四街道市 89才
故 早川 節子 様 平成二十八年一月一日 千葉市若葉区 83才
故 今村 俊子 様 平成二十八年一月八日 君津市 89才
故 植田 一雄 様 平成二十八年一月九日 千葉市中央区 89才
故 齋藤 康吉 様 平成二十八年一月十三日 富津市 75才
故 京相 和男 様 平成二十八年一月十六日 山武市 86才
故 中島 麻子 様 平成二十八年一月十六日 松戸市 100才
故 岡村久美子 様 平成二十八年一月十六日 千葉市花見川区 78才
故 厚井 正毅 様 平成二十八年一月十七日 船橋市 85才

故 佐田ハルエ 様 平成二十八年一月十七日 浦安市 100才
故 佐久間芳子 様 平成二十八年一月二十一日 香取郡多古町 80才
故 土屋幸一郎 様 平成二十八年一月二十四日 香取市 73才
故 北奥 マキ 様 平成二十八年一月二十六日 鎌ケ谷市 84才
故 小倉美根子 様 平成二十八年一月二十七日 茂原市 94才
故 惠畑 節 様 平成二十八年一月二十九日 香取市 89才
故 都築 富枝 様 平成二十八年一月三十日 四街道市 93才
故 奥山 靖子 様 平成二十八年二月三日 千葉市中央区 87才
故 宮本 和子 様 平成二十八年二月七日 船橋市 79才
故 菅谷千代子 様 平成二十八年二月八日 銚子市 80才
故 村上 眞澄 様 平成二十八年二月十一日 香取郡東庄町 64才
故 佐久間きく 様 平成二十八年二月十二日 千葉市美浜区 87才
故 青木 一子 様 平成二十八年二月十五日 安房郡鋸南町 90才

故 佐野 均 様 いすみ市 平成二十八年二月十九日 67才
故 青木 幸子 様 長生郡長柄町 平成二十八年二月二十日 74才
故 杉山 一夫 様 茂原市 平成二十八年三月十二日 87才
故 酒井すの子 様 柏市 平成二十八年三月十三日 66才
故 椎名 正江 様 八街市 平成二十八年三月二十四日 94才
故 高橋 良三 様 柏市 平成二十八年三月二十九日 70才
故 南村 昭朗 様 香取市 平成二十八年四月九日 85才
故 藤澤 ムネ 様 銚子市 平成二十八年四月十七日 98才
故 小菅 知江 様 習志野市 平成二十八年四月十九日 92才
故 丹治 胤雄 様 八千代市 平成二十八年四月二十日 100才
故 荒井 てる 様 佐倉市 平成二十八年四月二十一日 99才
故 新井 正治 様 袖ヶ浦市 平成二十八年五月九日 97才
故 望月 豊長 様 南房総市 平成二十八年五月十四日 88才
故 関口キヨ子 様 柏市 平成二十八年五月二十日 82才
故 高原千鶴子 様 木更津市 平成二十八年五月二十三日 85才
故 若林 節子 様 千葉市稲毛区 平成二十八年五月二十五日 74才
故 山口 尚子 様 木更津市 平成二十八年六月三日 76才

故 森村 悦明 様 千葉市花見川区 平成二十八年六月五日 85才
故 南部 富子 様 浦安市 平成二十八年六月六日 91才
故 石井千英子 様 千葉市中央区 平成二十八年六月八日 77才
故 八田 文宏 様 千葉市美浜区 平成二十八年六月九日 71才
故 岩澤 厚 様 八千代市 平成二十八年六月十五日 65才
故 間中 和子 様 野田市 平成二十八年六月二十日 86才
故 大園 泰造 様 柏市 平成二十八年六月二十三日 82才
故 岡部 良夫 様 千葉市中央区 平成二十八年六月二十七日 89才
故 下田 君子 様 船橋市 平成二十八年六月二十九日 95才
故 木村 春夫 様 四街道市 平成二十八年六月三十日 83才
故 藤野 道行 様 千葉市美浜区 平成二十八年七月七日 89才
故 柏谷 典男 様 君津市 平成二十八年七月八日 87才
故 小林 孝之 様 船橋市 平成二十八年七月八日 96才
故 髙橋 邦夫 様 船橋市 平成二十八年七月十六日 88才
故 横田 洋子 様 市原市 平成二十八年七月二十二日 83才
故 柴村 千代 様 柏市 平成二十八年七月二十七日 100才
故 瀬﨑 肇 様 船橋市 平成二十八年八月八日 89才

故 髙木 浅次 様 南房総市 平成二十八年八月七日 89才
故 影山 廣 様 千葉市稲毛区 平成二十八年八月十四日 93才
故 小川 政二 様 千葉市緑区 平成二十八年八月十六日 96才
故 友利 昭男 様 千葉市中央区 平成二十八年八月十八日 71才
故 子安 正治 様 船橋市 平成二十八年八月十八日 97才
故 西崎 義衛 様 館山市 平成二十八年八月二十七日 82才
故 吉利 信子 様 千葉市美浜区 平成二十八年八月三十一日 78才
故 須藤 昌宏 様 船橋市 平成二十八年九月二日 82才
故 髙橋 勁 様 香取郡多古町 平成二十八年九月五日 89才
故 増田 宏芳 様 佐倉市 平成二十八年九月六日 88才
故 鳥羽 孝子 様 佐倉市 平成二十八年九月十日 91才
故 齊木美世子 様 船橋市 平成二十八年九月二十日 90才
故 鈴木 直美 様 千葉市若葉区 平成二十八年九月二十四日 76才
故 原田 幸一 様 千葉市稲毛区 平成二十八年九月二十四日 83才
故 兼平 和子 様 いすみ市 平成二十八年九月二十四日 84才

千葉白菊会設立50周年記念講演

設立五十周年記念式典終了後、高橋和久先生の記念講演がありました。身近な演題に会員の方々の関心は高く、最後まで熱心に耳を傾ける方がほとんどでした。講演後、高橋先生には、講演への質問ばかりでなく日頃の整形外科への疑問などにも快くお答えいただきました。

「要介護になる前に ― 足腰が弱るロコモの話 ―」

千葉大学大学院医学研究院 整形外科学前教授 高橋 和久

本日は千葉白菊会設立五十周年の記念講演会にお招きいただきまして誠にありがとうございます。私は、四十四年前になりますけれども、千葉大学医学部で解剖学の実習をさせていただきました。外科医にとって人体の構造を理解するというのは基本中の基本になります。その解剖実習が、その後の私の医師としての人生を大きく決定したといっても過言ではないと思います。その意味で白菊会の皆様の崇高なご意志には、心よりの敬意を表したいと思います。

皆様ご存知だと思いますが、整形外科は骨（こつ）、関節、筋（きん）、腱、じん帯、あるいは脊髄、末梢神経などの運動器の治療をする医学でございます。また、運動器の研究も行う学問ともいえます。現在整形外科学は様々な分野で大きな発展を示しております。手術法も極めて進歩しておりますが、八十％以上は保存治療という手術以外の、リハビリテーションとか、お薬とか、様々な治療を駆使しておりまして、相当守備範囲の広い科であると考えております。

ロコモの根本の考え方

さて本日の本題のロコモでございますが、正式にはロコモティブシンドローム、日本語では運動器症候群といいます。手足、背骨の障害のために身体が動きづらくなる状態、移動できなくなる状態を意味する言葉でございます。

この言葉を初めて提唱されたのは、東京大学整形外科の名誉教授　中村耕三先生です。整形外科では、膝が痛む方だと膝だけを診る、股関節が悪い方だと股関節だけを診るという傾向がありますが、人間を部分部分に分割して診るのでは不十分であるという考えです。人間の各部位は全て移動を行うのに関連していると考えて、身体全体を診ようではないかというところにロコモの根本の考え方がございます。

この背景には日本人の平均寿命の延びがございます。女性の平均寿命は八十六・八三歳、世界一位でございます。男性は八十・五〇歳、男性も世界三位です。寿命には平均寿命の他に、健康寿命という考え方がございます。「日常生活に介護を必要としない心身ともに自立的な状態で生存できる期間」と定義されています。これが女性は平均で七十四・一歳、男性は七十一・一九歳でございます。単純に考えますと、女性の場合、十二年間は何らかの介護が必要になってきます。

六十五歳以上の人口が総人口に占める割合を高齢化率といいます。高齢化率が七％以上は高齢化社会、十四％以上は高齢社会、二十一％以上は超高齢社会と呼ばれます。我が国はどうか、二十六％です。日本は世界で唯一、超高齢社会に達した国です。このような超高齢社会において健康寿命をどのように延ばすかは非常に大きな問題でございます。

要支援とか要介護になる原因は、なんと運動器の障害が四分の一を占めております。変形性膝関節症は二千五百三十万人と推定されます。変形性腰椎症三千七百九十万人、骨粗しょう症の腰痛六百四十万人、骨粗しょう症の大腿骨頚部千七十万人。このうちどれか一つ以上ある方が四千七百万人と推定されておりますので、我が国の三人に一人以上の方が運動器の病気を既にお持ちであるといえます。

ロコチェックをしてみましょう

それではロコモかどうかを調べる方法ですがロコチェックといいまして、チェック項目は次のとおりです。

① 片足立ちで靴下がはけない。
② 家の中でつまづいたり滑ったりする。
③ 階段をあがるのに手すりが必要である。
④ 家のやや重い仕事が困難である。例えば掃除機で掃除をするのが大変だとか。
⑤ 二キログラム程度の買い物をして持ち帰るのが困難である。
⑥ 十五分くらい続けて歩くことができない。
⑦ 横断歩道を青信号で渡れない。これは日本の横断歩道であります。よくアメリカとか、外国へ行かれるとすぐ信号が変わってしまって渡り切れない。あの人たちは車の交通しか考えていませんけれども、日本は歩行者を考えていて秒速一メートルで歩ければ完全に渡りきれる青信号の時間になっています。それが渡りきれないということは歩行速度が落ちているということになります。

これらの七つのうち、一つでもあればロコモの疑いがあることになります。

立ち上がりテスト

※ロコモ度テストとロコモトレーニングの説明図は「ロコモチャレンジ！推進協議会WEBサイト」より転載

次はロコモ度テストです

次にロコモの程度を調べるにはロコモ度テストというのがございます。

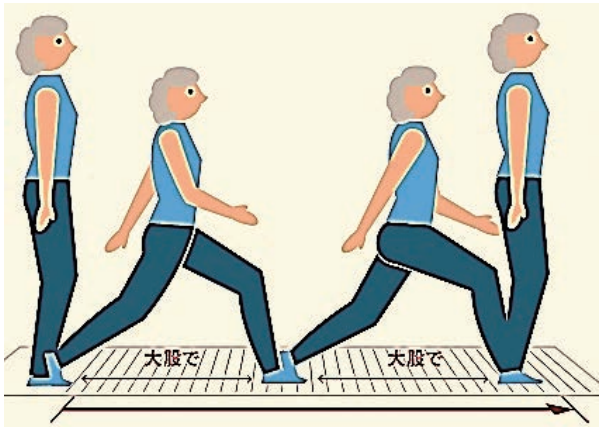
一つ目が立ち上がりテスト。十センチから四十センチまでの椅子、あるいは台を用意していただき、ここから手を前に組んで両足、あるいは片足で立ち上がる。立ち上がる際は少し膝を曲げて立ち上がりますし、片足の場合は、反動はつけずに立ち上がるということになります。で立った後、三秒間静止しなければなりません。

二番目がツーステップテスト。立った状態から思い切り二歩踏み出して、その二歩幅を身長で割った値です。これは筋力だけでなくバランス、あるいは柔軟性、歩行能力を評価するのに役立ちます。

三番目はロコモ25といい、運動器に関する体の状態や生活の状態をチェックシートでチェックするものです。質問が全部で二十五ございまして、それぞれ四点ですので百点満点。点数が多いほど運動能力が劣るということになります。

これらを総合してロコモ度を決めます。立ち上がりテストで片足四十センチの高さから立ち上がれない、あるいはツーステップテスト値が一・三未満である。ロコモ25が七点以上、のいずれか一つがある場合にロコモ度一とします。体が動きづらくなり始めた状態、ご自分で筋力訓練とかバランス訓練を行う必要があります。さらに進みますと両足で二十センチの高さから立ち上がれなくなる、あるいはツーステップ値が一・一より小さくなる、ロコモ25の結果が十六点以上になる、いずれか一つでロコモ度二です。かなり体の動きづらさが進行している状態ですが、何か病気が隠れているかもしれませんので整形外科医にご相談なさるのがいいでしょう。

ツーステップテスト



ロコモの原因になる病気

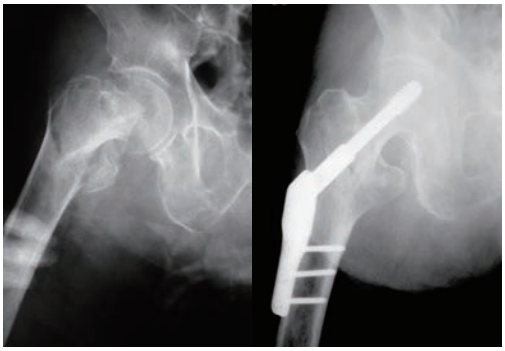
次にロコモを起こす代表的な病気を三つほど挙げておきます。

まず一つは腰部脊柱管狭窄症です。いろいろな原因で背骨の中の管が狭くなって神経が押されてしまい、歩くとお尻から足にかけて痛みやしびれが出てきて歩けない、前かがみになって腰掛けると症状が消えます。自転車に乗ったり、スーパーでカートを押したりすると症状は出にくい。こういう症状がある方は脊柱管狭窄症の可能性があるわけです。腰部脊柱管狭窄症に似た症状の病気に動脈硬化性血管閉塞症があります。足にいく動脈が動脈硬化でつまり血の流れが悪くなる、そうすると脊柱管狭窄症と非常に似た症状が出てきます。ただ動脈硬化性血管閉塞症では自転車をこいでも駄目です。

この脊柱管狭窄症には色々な治療がありますが、手術になる人は一部です。一つはコルセットで下腹部をよく締める、そうすると腰の反りが取れて歩けるようになる方がいらっしゃいます。これは出来合いのコルセットで健康保険が効きますので五、六百円で手に入ります。体操をするのなら膝を抱え込むようなストレッチ。あるいは椅子に腰かけて下をのぞきこむような、腰の反りを取る運動がよろしいかと思います。

次に膝です。この中にも変形性膝関節症といわれた方がいらっしゃるかもしれませんが、どういう病気か。中高年の女性に多く、日本人の場合多くがO脚になります。膝の関節が腫れる、あるいは膝のお皿のちょうど内側のちょっと下あたりが痛い、立ったり座ったりするときに痛い。正座ができない。ただ歩いてしまえばなんとかなる。冬の寒いときは痛みが強いけれども、お風呂に入るとかなり楽である。こういうのが特徴的な症状です。この変形性膝関節症も様々な治療があります。薬から注射ですね。最後は手術になりますが、これも全員が手術になるわけでは当然ございません。変形性膝関節症に科学的に効果があるといわれているのは大腿四頭筋（だいたいしとうきん）の訓練でございます。仰向けに寝て十センチくらい踵を上げる、五秒ぐらい我慢する。これを十回くらい、一日二、三回以上をやる。それから椅子に腰かけて、膝を伸ばしたまま持ち上げて五秒間止める。そうすると太腿にかなり負担がきます。この太腿の強さを保つことによって膝の痛みが軽くなる場合もあります。

次は骨粗しょう症。何が問題かというと骨折ですね。骨のカルシウムが減る、骨の強さが減る、この二つを合わせたものが　骨粗しょう症の定義でございます。六十代の方は転んだ時に手をつくことができるんです。だから若い方は手首が折れることが多いです。手首の骨折はギブスで直すこともよくありますが、手術も行われます。少し高齢になりますと、転んで肩を折る、上腕骨の頚部骨折はよく起こる骨折です。さらに尻もちをついたときに起こす骨折が脊椎の圧迫骨折、あるいは破裂骨折です。もっと年配になりますと転倒による大腿骨頚部骨折あるいは大腿骨転子部骨折を起こします。この



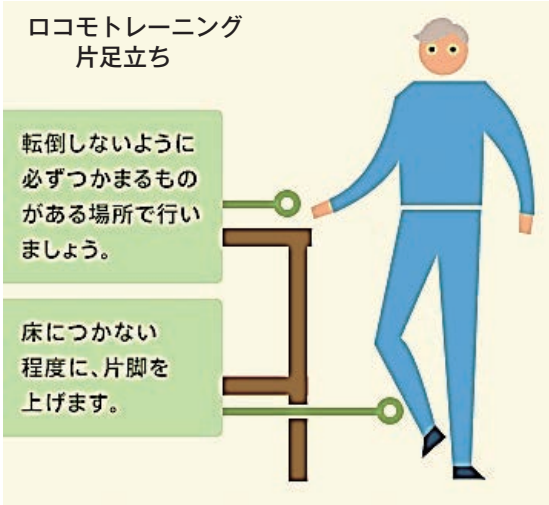
107歳男性　右大腿骨転子部骨折

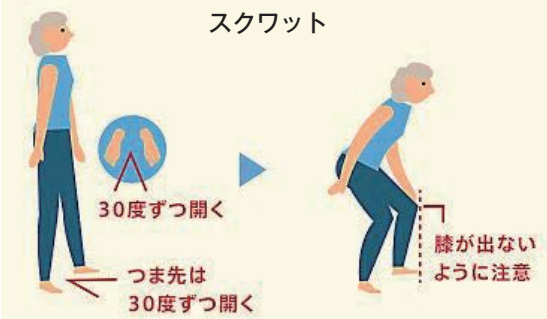
方、百七歳ですね。百七歳で骨が折れたということは歩いてらしたということですね。大腿骨頚部あるいは転子部骨折というのは、かなり緊急の手術になります。翌日とか翌々日にはできれば手術したほうがいい。できるだけ早く手術してリハビリを開始する、これがすごく大切で、この状態で骨がつくまで待ってるとしたらですね、当然寝たきりになってしまいますし、寝たきりになりますと肺炎、膀胱炎、褥瘡を作ってしまうということになります。この方は手術した後にまた歩けるようになりました。

ロコモトレーニングのやり方

このロコモの予防のポイントでございますが、ひとつは足腰を強化するという方法。筋力だけでは駄目で、筋力とバランス力を両方鍛えなきゃいけない。日本整形外科学会で推奨しているロコモのトレーニングが二つございます。

片方は開眼の片足立ちです。片足立ちのやり方ですけれども、片足を床につかない程度に上げて、そのまま一分立っています。転ぶとまずいので、近くにテーブルとか椅子を置いていただければ安全だと思います。それで掴まれるようにしておく。そんなに高く上げる必要はございません。十センチくらい上げれば充分です。左右で一セットとして、一日三セットくらいやるといいです。一分立っていられないという場合には、転倒しないように配慮して介助者といっしょに行うといいです





次にスクワットですが、肩幅より少し広めに足を広げ、椅子に腰かけるようにお尻をゆっくりと下げて上げます。できるだけ膝先がつま先より前に出ないように、膝が内側に入らないように注意する、何かお相撲さんの姿勢に似ていますよね、これがいい。これができない場合はお尻を浮かせたままテーブルに手をついて、万が一転んでも大丈夫なように後ろに椅子を置いて、実際は椅子に腰かけない。浮かせたまま立つ姿勢に戻る。これが困難な場合ですけども、ゆっくりとお尻をおろして、次は実際に椅子に座ってしまう、さらにそれも難しい方もたぶんいらっしゃると思いますが、そうしたら、こう腰を浮かすような気持になるだけでもいいです。同じ姿勢をとって筋肉に力をいれるだけでも効果がある、といわれていますので、これをお試しいただけたらと思います。スクワットは五、六回の繰り返しを一セットとして一日三セット行います。

健康寿命を延ばしましょう

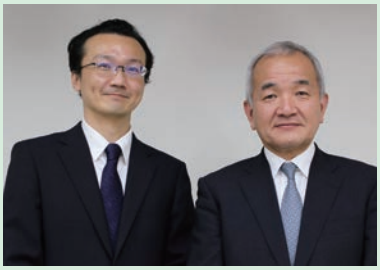
健康寿命をどう維持するかというのは、色んなことがあります。好きなことを楽しんでやる。ゴルフが好きな方、釣りをする方とか。デパートとか広々として空調も効いていますからショッピングもいいでしょう。まず好きなことを楽しんでするというのは非常によいことです。

それから運動する場合は一日のトータルの運動量が維持されれば構わないので、疲れたらそのたびに休んでいればいいです。一番悪いのは過度の安静です。若い方がご両親などに「危ないから家でじっとしていてください、食事は私が作りますからやらないでください、洗濯なんかしないでください」これはすごく悪い。内科の病気とは違います。運動器の病気については、過度の安静は有害です。インフルエンザとか肺炎とか予防できる病気は予防しましょう。インフルエンザで三日寝込むとそれを回復するのには十日以上かかりますからね。

それからもうひとつ、これも私の個人的な考えですが、何か世の中に役立つことをやるということが、自分の健康を保つのにいいのではないかと考えております。

最後の話になるんですが、私は今年の三月で定年になりました。もちろん地域医療で少し働いてはいるんですが、今年の正月から家庭菜園を、畑なんて全くやったことなかったんですけれども、色んなものを植えています。作物が実るかどうか全然わからないんですが、プロセスを楽しむのが目的ということでやっております。「高橋は農業ばかりやってて、もっと働け」って言われる方がいるんですが、これは私なりに自分の健康寿命を延ばそうということです。

家庭菜園が高橋先生の健康の秘訣



左：鈴木先生、右：高橋先生

司会の鈴木先生は、「私は整形外科の出身で高橋先生のご指導を仰いでいました。尊敬する高橋和久先生を皆様にご紹介できるのはこの上ない喜びです」と紹介されていました。

講　師　略　歴

1950年　千葉県松戸市で生まれる
1976年　千葉大学医学部卒業
1980年　米国 メイヨクリニック整形外科バイオメカニクス研究室留学
1984年　香港大学整形外科学教室留学
1985年　千葉大医学部附属病院整形外科助手
1994年　同 講師
2003年　千葉大学大学院医学研究院整形外科学助教授
2007年　同 教授
2009年　千葉大医学部副医学部長、千葉大医学部附属病院副病院長
2011年　千葉大学大学院医学研究院副研究院長
2016年　〃 退任後 各所で診療・講演活動

要介護になる前に ～足腰が弱るロコモの話～　大変参考になりました

高橋和久先生の貴重なご講演に感動申しました。国立千葉医療センターにて先生のお弟子の阿部巧先生より膝の手術をしていただきました。現在、順調に運動できます。心よりお礼申し上げます。

（塚原敏雄）

今日はすぐに役立つロコモの勉強が出来、ホントによかったです。ありがとうございました。

七十三歳の一人暮らしの者にとり寝たきりはホントに恐怖です。参考にして役立てたいと思います。

（無記名）

質問があります

私が先生を知ったのは千葉大病院で案内係のボランティアをしている今年三月のこと。ある患者さんが「高橋先生が四月から斎藤労災病院に移られるので、私もそちらに移る」とのこと、「素晴らしい先生で云々」との事でした。私は整形には縁がないですが、労災に行き先生のプロフィールを見て、紹介状・予約もなく、すぐ大先生に診てもらえる労災の整形外科を宣伝したくなってしまいました。本日のロコモのお話、大変勉強になりました。私は現在七十六歳、身近にこんな立派な先生がいてくださるか――　なるべく御世話にならぬよう、今日の勉強を活かして生活しようと思います。先生ありがとうございました。

（布施美紀子）

記念講演は大変参考になりました。これからも高齢者向けの内容の医学講演をお願いします。

（無記名）

ロコモティックシンドロームの話、とても役立ちました。年齢的にタイムリーとした予防方法の説明が有ったのがとても役立ったと思いました。

（中村恵美子）

高橋先生の講演を聞き、去年要介護になりかかった体験を思い出しました。脊柱管狭窄症で第四と第五の脊骨にできたトゲのような骨の除去手術をし、痛みやしびれは無くなりました。しかし、退院後に腰全体が動くと痛み、しゃがむ、あお向く、ねじるなどやシャンプー・入浴など、自由に動けなくなりました。介護保険を使って入浴椅子を買いました。一ヶ月間は体を横にしたほうがラクな日が続きましたが、ふとこのままでは要介護になると気付き、花壇の草むしりを少しずつはじめました。花が大好きなのです。毎朝少しずつ動かし二週間でしゃがんだり立ったりできるようになり、一ヶ月がたつ頃には自由に痛みがなく動けるようになりました。寝たきり寸前になったことを思い、ロコモ体操の必要性をしみじみ感じております。

（酒井徳子）

医学部キャンパスの秋
（イチョウ）

生命の尊厳を守り医師の心を育てるために

私たち千葉白菊会会員の願いは、一口に言えば、献体という行為を通して医学生のみなさんが「立派な医師の心を育む」お手伝いをすることです。以下のページでは環境生命医学教室の森教授に、献体の精神に応えるために千葉大学解剖学教室がどのような取り組みをしているのか、分かりやすくお話しいただきました。そして、初めて解剖実習を経験した医学生らの真摯な心の声もたくさん届いています。

献体の精神に応えるために…
千葉大学解剖学教室の取り組み

千葉大学大学院医学研究院環境生命医学教室　森　千里

千葉白菊会設立五十周年おめでとうございます。皆様から頂いたお体を医学に役立てるため、そして崇高な献体の精神に応えるために、当方が担当しております千葉大学大学院医学研究院環境生命医学教室では様々な取り組みをこれまで行って参りましたのでその内容についてご説明させていただきます。環境生命医学教室は、元々は千葉大学医学部解剖学第一講座として一九四九年から長い歴史があり、二〇〇一年に千葉大学医学部の大学院改組化により名称が変わりました。名称は代わりましたが、医学部教育における肉眼（人体）解剖学教育に関して、新しい試みを取り入れながら発展させている状況です。私の祖父森於菟（森鷗外の長男）は当教室の前身である旧解剖学第一講座の非常勤講師として一九五〇年代から六〇年代前半に解剖学（特に骨学）の講義を担当していたことや、曾祖父鷗外も東京芸大で美術解剖学教育に携わっており、私は解剖学教育に関して先祖からも大きな役目を背負っていると感じながら職務を遂行しております。

二十一世紀に入ってからの千葉大学での解剖学教育は、①医師の心を育てるため、②献体の活用範囲の拡大、③優れた医学生を養成するため、の三つの柱を中心に行って参りました。

①医師の心を育てるために

私たちは学生がただ解剖学の知識を学ぶだけでなく、医師になる前に献体の精神を感じることが大事と考えています。そのために医学生と白菊会会員との交流、白菊会総会・慰霊祭での全学生の参列、献体の碑の建立があります。

肉眼解剖学実習の初日に白菊会役員の方々から「献体動機」についてお聞きする時間を持っております。肉眼解剖学実習が無条件・無報酬という尊いお気持ちで成り立っていることを十分に知った医学生は、他者への貢献という医師に必須の心構えを自覚して初めての解剖実習を行うことになります。また、解剖実習の最終日には、白菊会役員の皆様が「懇談

会」を開いて下さり、数ヶ月にわたる解剖を経て精神的に成長した医学生達と再会して頂いております。

また、白菊会総会と慰霊祭において解剖を終えた医学生が参列して、献体された方々の御霊に御礼の気持ちをお伝えします。また、慰霊祭終了後には式典会場からバスでお帰りになられる御遺族の皆様に黙礼してお見送りをさせて頂いております。

さらに、解剖実習の時に感じた生と死、医師になるという使命感を忘れないために、学生が毎日通る正門前の木立の中に、献体の碑を建立しました。献体の碑には、「献体の心、無条件・無報酬」、「白菊の花言葉、献身・誠実」が刻まれ、毎年成願された献体者の名簿を奉納しています。学生はこの献体の碑を見る度に医学を学び始めた「初心」を思い出すことを願っております。

②献体の活用範囲の拡大

私たちは頂いたお体を、もっともっと医学のために役立てることができるのではないかと考え、活用範囲を拡大して新たな試みを進めております。医学とは生涯教育であり、学生、研修医、経験豊富な医師を問わず、いつでも教育・研究の機会を与えるべきであると考えています。

そのため、現役医師の手技教育・医学研究のためのクリニカルアナトミーラボ（写真）を創設しました。医療技術の急速な進歩に医師自体が追いつくために、医師が臨床的な視点で解剖を学ぶことは、非常に重要です。千葉大学にこのクリニカルアナトミーラボが出来てから、県内だけで無く、日本全国から多くの先生方がお見えになり解剖を学んでいます。また、医師以外でも医学研究を行っている大学院の学生達や、千葉県内にも看護学校や救急救命士・理学療法士を養成する学校もたくさんあります。彼らも医学を志す上で解剖学は必須です。我々はそういった学生達にも献体を用いて人体の構造を直に観察する機会を提供しています。

③優れた医学生を養成するために

千葉大学では、優れた解剖教育をするための新しい試みにも取り組んでいます。解剖実習室の室内空気環境（刺激臭のするホルムアルデヒド低減）改善し、長時間の集中した解剖実習を可能としました。また臨床医学ではCTや血管造影などの技術革新により、体内の様子が観察できるようになってきました。最新の医療用画像を取り入れた講義や、附属病院の外科領域の先生方にも解剖学教育に加わって頂き、将来必要となる実戦的な知識を低学年から植え付けられるように努力しております。

千葉白菊会が設立して五十年、皆様に支えられて医師になった学生は、総勢四千九百三十名にも及びます。また、クリニカルアナトミーラボで勉強された医師もわずか五年で総勢千四百三十一名に達しております。この千葉白菊会が、千葉県、そして日本の医療へ果たしている貢献度の高さは疑いようがありません。

私たち千葉大学は、これからも白菊会から頂いた善意の献体を通じて、優れた医療人を育てて参ります。今後も御協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

医学部二年生 解剖実習感想文

医学生が必ず通らなくてはならない〝大関門〟の一つが肉眼解剖学実習の現場です。今回は平成二十七年十一月四日から平成二十八年二月十九日まで、医学部二年生がその学びの場を体験しました。初日のガイダンスでは、白菊会会員の献体申し込みの動機などに熱心に耳を傾け、実習への意欲を固めました。ここに紹介するのは医学生の心のこもった感想文です。

白く輝く照明

石川　凜太郎

初めて解剖実習室に入った時のことは、今でもよく覚えています。地下に降りていき鉄の扉を開けるとひやりとした空気が体を包み、白く輝く照明が自然と私の気持ちを引き締めました。思えば、医学部に入学する際に最も意識した科目の一つが解剖学でした。自分が御遺体に向かった時にきちんと目をそらさずに御遺体から学ばせていただくことができるか。これは医学部を志望するにあたって、逃れることのできない問題でした。初めての解剖実習の授業の日、その決心した瞬間がこれから訪れるのだと思うと、感慨深いと同時に、一層気を引き締めなければならないと実習前の授業の際から思っていました。しかし、自然とそうさせる空気がその教室にはあったのです。解剖実習を進めていくとはじめは恐る恐る作業を進めていましたが、だんだんと人間の体の神秘に吸い込まれていくようになりました。人間の体は非常によくできていて、まさに奇跡だと思えるほどでした。

そうした解剖学としての面白さに気づいていくとともに、御遺体に触れ、お顔を見るたびに、この方にも人生があって様々な困難を乗り越えてここまで生きてこられたのだという思いが胸にこみ上げてきました。その中で医療の役に立てばと御献体を決心されたのだと思うと、長時間の実習で疲れていても手を抜くことなど決してできないと感じました。お亡くなりになってから実習で解剖させていただくまでに数年かかると聞きます。私は祖父母をすでになくしているのですが、その際には、葬式を終えて火葬場で灰になってしまった姿を見てようやく本当に逝ってしまったのだと実感したものです。葬式で祖父母の棺に入った姿を見たときには涙が込み上げてくるとともに、今にも目を開けてまた何事もなかったかのように起きてきてくれるのではないかとひそかに期待してしまう自分もいました。そういった実感があったからこそ、大好きだった祖父母を亡くした悲しみから立ち直ることができたのだと思います。しかし、御献体いただいたご家族は亡くなってすぐにそういった儀式を執り行うこともできません。解剖していただいた後も棺からお顔を確認することもできません。そういったことを踏まえて、御献体を決意いただいた御遺体の先生方、そしてご家族への感謝が堪えません。必ずやこの経験を自らの財産として生涯持ち続けていきたいと思います。

静寂の手紙

岩井　沙椰

解剖実習の開始時と終了時、しばしの静寂が私を包む。目を閉じて献体してくださった〝先生〟に語りかける。実習中は目の前の勉強や作業で手一杯になってしまう私にとって、先生と静かに向き合える黙祷の時間はある意味で特別だった。献体への

感謝は当然のことだが、それ以外にも自分の疑問や悩んだことなど、様々な気持ちを黙祷に託した。まるで書きためた手紙を渡すようなそんな感覚だった。

先生は一体どのように生きてこられたのか。たしかこれが一番最初に投げかけた疑問だ。そしてこの時から、先生からのお返事はいつも、その静かな御体を以てなされた。私はそのお返事を一言一句読み飛ばさぬよう、生前の様子がうかがえる身体所見は特に注意深く観察した。人の生き方はそれぞれ違っていて、つまり身体もどれ一つとして同じものはなく、教科書通りになんていかないということを教わった。解剖実習の意義も実感した。しかしながらご遺体を観察すればするほど先生のことをさらに知りたくなるのも事実で、先生が生きておられるうちにお会いできたらどんなに良かっただろうと思ったりもした。こうして感想文を書いている今も私は先生のお名前すら知らず、「先生」「ご遺体」などとしか呼べないことが少々寂しく感じられる。

良い医者とはどのような医者か。私はどのような医者になるべきなのか。これは半ば自分への問いかけでもあるが、先生に投げかけずにはいられなかった。なぜなら先生は、私たちの医学生が良い医者になれるようにと自らの御体を無条件に差し出してくれたご本人だからだ。私はその先生の意向に添う生き方をしたいと思った。そして先生からのお返事は、やはりその御体、その生き様によって語られた。「誰かのため」。私の前に横たわる先生のご遺体は、その気持ちの固まりだ。先生が私たち医学生のために献体してくださったように、私もいつか自分以外の誰かのために全力を尽くしてみたい、それが良い医者としての第一条件なのではないか、と私は考えるようになった。

私がいつか誰かのために全力を尽くせた時、先生の人生が本当の意味で全うされることを祈りながら。

黙祷の誓い

金子侑暉

医学部でない人に「今日は解剖の授業がある」と言うと「豚の解剖？」とか「カエルの解剖ならしたことがあるよ」と言われます。それは、他学部の人たちが人の解剖があるとは想像しておらず、まさかそれを支える「白菊会」という存在があるとも知らないからです。実際、私も人体解剖の存在は知っていても「白菊会」の存在は知りませんでした。しかし、解剖を終え、今となっては私のキャリアからは切っても切り離せない存在となりました。それは単純に感謝という言葉だけでは表せない、それこそ一般人の常識を超えた献体の方々の精神性によるものです。

解剖初日、黙祷の時間に私は目の前の方に心の中で話しかけました。

「私たちの勉強のために献体してくださり本当にありがとうございます。精いっぱい頑張るのでよろしくお願いします。」

そしてこの日以来、黙祷の際に心中で話しかけることが習慣となりました。メスを入れた瞬間の身が引き締まる思いは生涯忘れることはないと思います。そして解剖が進み、からだの仕組みがひとつひとつ分かるにつれて、解剖している献体の方がどんな人なのかも少しだけ分かった気がしました。この感覚は私たちだけが感じることのできる特別な感覚なのだと思います。

長かったはずの解剖実習もあっという間に終わり、納棺式の日になりました。私たちは献体の方の家族ではありませんが、私個人の気持ちとしては同等のように特別な日でした。実習台を清掃している間、解剖中のことが頭を駆け巡りまし

た。思い出すと初めての医者を意識した授業でやることも難しく実際の作業量より忙しそうな自分がいました。将来医師になって忙しくて自分を忘れそうな時もこのことを思い出すのかなと思うと、技術面だけでなく精神面でもこれからの自分を支えてくれるのだと感じました。

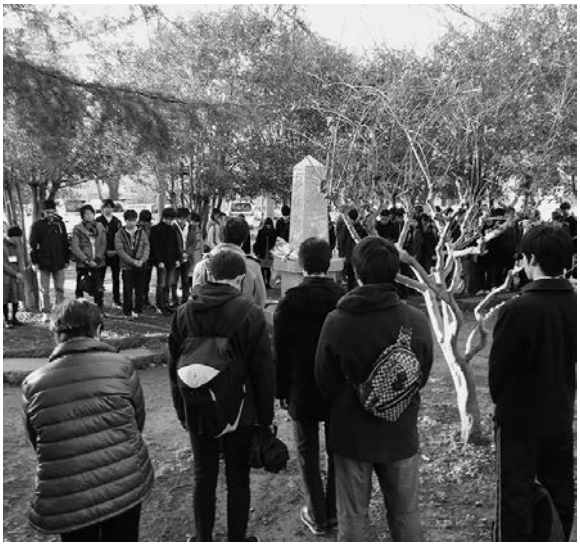
最後の黙祷の時間、自然と目頭が熱くなりました。それはきっと解剖を終えた達成感だけによるものではないと思います。最後の黙祷でも心の中で話しかけました。

「今まで本当にありがとうございました。(ご献体の)先生の精神に恥じない医師になるので、どうか見守っていてください。」

解剖を終えて、順調にいけば私はもうすぐ三年生になります。しかし、この経験は学年を上げるための一過程というわけでは決してなく、医師としての倫理観はもちろん、人として大きくなるためのものであったようにも思えます。

その機会を作ってくれた大学、環境生命のスタッフの方々、そして「白菊会」の方々にはとても感謝しています。

これからも決して緩い道ではないと思いますが、精進していきたいと思います。



献体の碑に献花し、感謝の気持ちを表しました

衝撃と不安と充実の日々

高橋　誠志郎

二〇一五年十一月四日。ご献体の先生から学ぶという初めての経験をしたその日を私は忘れることはないだろう。

肉眼解剖学実習についての話はかねてより先輩からよく聞いていた。「医者になるということを本格的に意識する」「肉体的にも精神的にも真剣にご遺体と向き合う」など、いろいろ聞いてはいたのだが、実習前はその言葉の意味をよく理解することが出来なかったのが正直なところであった。

解剖学実習の前に、白菊会の方々の説明があり、私は一種の衝撃を受けた。こんなにも多くの方が、生前に死後の意思を決め、私たち医学生の学習のために、そして未来の医学の発展のために体を捧げていただいているということに素直に感動し、身が震えた。これから始まる実習に対する気持ちが引き締まったことをよく覚えている。

肉眼解剖学では、いわゆる他の講義での〝先生〟はスタッフとよび、ご献体の方のことを先生とよぶ。実際に体を献じて我々に人体の仕組みを教えてくださるからだ。

事前講義が終わり、いよいよ実習が始まるときがやってきた。地下の解剖学実習室で解剖班の班員とご献体を覆う白布をとる。とても緊張した。これがご献体の先生にお会いする初めての瞬間であった。私はこの時、ご献体の先生に一種の神々しさを感じずにはいられなかった。献体の精神の崇高さを改めて深く感じた。

ご献体の先生に初めてメスを入れるとき、緊張で手が震え、手先が狂いそうになった。ご献体の先生に学ばせていただくことのありがたさをひしひしと感じていたのである。

解剖学実習が始まってから、私の生活リズムは解剖学実習中心になった。予習をていねいに行い、実習に本気で取り組む日々が三か月近くも続いた。そして実習が終わって家に帰ると、思ったよりも疲れていてそのまま寝てしまうこともあった。不思議と嫌なことではなく、むしろ充実した日々であった。

その実習にもついに終わりが来てしまった。三か月という時間は始まってみると思ったよりも短く、物足りない気持ちも感じた。実習が終わって生活リズムから解剖学実習がごそっと抜けると、どこか空虚なる感情を抱くことがあった。それと同時に、私が費やしてきた三か月がいかに濃密なものであったかということ、そしてこれほどに熱中して何かを学ぶという経験は生まれて初めてであったことを痛感した。

今後、実際にご献体で学ばせていただく機会というものはなかなかないのだという。私は将来医者になっても、今回の実習で得た知識や経験、そして何よりもご献体の精神への感謝の気持ちを忘れずに邁進して行きたいと思う。

連綿と続く命のバトン

安藤　英俊

約三か月に及んだ解剖学実習が終わった、充実した三か月の日々を過ごすことができた。私たちの解剖学実習は千葉白菊会の方々のお話から始まった。そのお話の中で最も記憶に残っているのが、「学生の皆さん、ありがとうございます」という挨拶である。この時はまだ御献体なさる方々の御意志を慮ることが十分にはできていなかった。だから、感謝を申すべきは私達であるのに、どうして感謝をされるのか疑問に感じた。だが、白菊会の方々や環境生命医学のスタッフの方々のお話を聞き、また実際にご遺体の先生を以て学習させてもらうことで、献体なさるその真意を理解することができた。

解剖実習は、人の体にメスを入れるという非日常的な行為から始まった。戸惑いを感じながらも解剖を進め、人体の様々な構造を自分の目で確認することができた。専門書を読むだけでは把握しきれなかったであろうことを多く学んだ。それは、層をなしまるで互いに力を合わせ合っているような筋肉の重なり合い、左右非対称であることが多く個人差も多いことを知った血管の走行や、有線で電気信号を伝えるために、筋肉や血管や臓器の間を巧みに通り抜け体中に張り巡らされた神経のルートなどである。実際にこれらの事を学べたことは間違いなく、医師となり患者さんと向き合うときに私たちの力となる経験であった。この経験は私の人生の中で最も「脳裏に焼き付けておきたい」と思った経験であり、解剖が終わった今、専門書の人体解剖図を見ると、ご遺体の先生の「個性」を鮮明に思い出すことができる。これらの貴重な知恵を身を以て与えてくださったご遺体の先生に感謝の気持ちが溢れている。

千葉白菊会の方が学生である私達に感謝の言葉を送ってくださったのは、「亡くなった後にご遺体の先生として、医療や医学の進歩に貢献でき、成願なのである」という御意志があるからであった。その感謝の気持ちをどう受け止めるべきかわからないままであったが、「吸収できることは全て吸収してやる」という意気込みで臨み、本当に多くの事を学ばせて頂いた。だから私は、納棺式の日、「こちらこそが本当にありがとうございました」と心の中でお礼を申しあげた。ご遺体の先生が生前、どれだけの経験をし、

どのような過程で献体をご決心なさったかを伺うことはできないが、より良い未来を願い、連綿と続く命のバトンに身を捧げ渡そうとしたことは想像することができる。私はそのバトンを受け、人命を背負う仕事をするのだと改めて肝に銘じた。最後に、ご遺体の先生とご遺族の方々、千葉白菊会の方々、環境生命医学のスタッフの方々、同じグループとなった同学の仲間達に改めてお礼を申しあげたい。ありがとうございました。

医学生としての責任と覚悟を持って

瀧口　翔太

今、解剖実習が終わった。十一月から始まり、三か月ほどの間学ばせていただいた。二年生になり、授業が専門的なものになり、医学を学んでいるのだという実感が増していったが、何より、解剖をさせていただいたことで、医師になるのだと、一人一人の命を預かる責任のある仕事に就くのだという自覚が芽生えた。

解剖の初日、白菊会の会員の方々のお話をうかがい、ご献体してくださった先生について初めて考えた。恥ずかしながら、それまでは解剖をするのだとは思っていたが、このご献体の先生は私たちと同じように生きていたのだとわかっていたつもりで、全く実感できていなかった。お話をうかがってから、実習室に入りご献体の先生の隣に座るまでは、どのような思いでご献体なさったのかをずっと考えていた。しかし、実際にご献体を目の前にして、さらに自分の覚悟の甘さに気づいた。初めて人間の遺体をみて、頭が真っ白になったし、これから本当にご献体にメスを入れるのかと怖気づいた。初めてメスを入れ皮下組織を覗いた時の瞬間は、今でも思い出せる。その日、家に帰ってから寝るまで、解剖の時間を思い出し続けたし、次の解剖が怖かった。しかし、回を追うごとに、ご献体なさった先生は医学の発展を願っていらしたのだろうと、その先生の思いにこたえるためにも、私は真摯にできる限りのことを学ばなくてはいけないと考えるようになった。

解剖を通して、人体の素晴らしさを学んだ。多くの筋肉や、骨、組織から無駄なく構成され、神経や血管が張り巡らされていて、とても繊細なものなのだと感じた。肝臓や肺などの臓器は思った以上に重かったし、すい臓などの質感は思いもよらないものだった。実際に手で触れたり、三百六十度いろいろな角度から見ることで、教科書を読んだり講義を聞くだけでは学べない、本当に貴重な体験をさせていただいた。また、人間には個人差があるということを学んだ。予習でみたアトラス※や教科書とは違う血管の走り方や分岐、それぞれの筋肉や臓器の大きさ、先生が生前受けた手術の跡など、どの人間も違うのだと知った。これから医師になる上で個人差があるということは難しさであると思ったが、同時にそれこそが人間の尊さであるように感じた。

最後に、医学の発展を願いご献体なさった先生をはじめ、その意思を尊重して私たちに先生を預けてくださったご遺族の方々に感謝申し上げます。これからの人生で、私は真摯に勉強をし、立派な医師になり、多くの方を救います。一人の人を解剖させていただいた医学生としての責任と覚悟をもって、日々精進していきます。本当にありがとうございました。

※アトラス：臓器の絵や写真が豊富な専門書

ご献体の“先生”に心からの感謝を捧げる

かけがえのない財産

菅原　ゆたか

十一月の初め、最初の解剖実習でメスを持った私の手は震えていました。人の身体に刃を入れることに恐怖していたのだ、とその時は思いました。しかし今思えば、私が怖いと感じていたのはその責任の重さであったのだと思います。他の授業もそれなりに真面目にやってきた私ですが、この解剖の実習では神経質なほどに真面目でした。こうして無事実習を終えて、医学生としての責任、そして献体の先生に協力して頂いた責任を果たすことができ、本当にほっとしています。

このプレッシャーという点で、解剖学の授業は私にとって特別な授業でした。その理由はいくつかありましたが、やはり一番大きかったのは「教授と学生以外の方」が関わってくる所です。それまでの授業はたとえ単位を落としてしまっても、親と教授に頭を下げれば最終的には自分の問題でした。しかし、解剖の実習は献体して下さった白菊会の先生方が、文字通り身を削って協力して下さっています。そんな授業で手を抜くというのはまず許されないことだろう、と心を引き締めて実習に取り組んできました。私の班は一番多く手を動かし、一番遅くまで残って実習を行っていた班です。少なくとも真剣さという点に関しては、献体の先生も納得して頂けると自負できる三か月でした。

解剖の時間で得た知識というのは座学で得た知識とは全く別物です。班員・解剖学教室の先生方・献体の先生の協力を得て一つずつ確認した人体の構造の知識は、その経験と合わさって強固に結びついています。解剖学の単語一つからでも、その時の実習の光景がすぐに脳裏に浮かんでくるのです。解剖学というのは人体の構造を大きな視点で捉える授業ですから、これから学ぶ生理学・組織学といった細かい視点からの授業における基礎ともなります。言うなれば、解剖学は医学の知識という大樹における幹の部分です。その最も重要な部分を座学だけでなく実習で学ぶことが出来たことは私達にとってかけがえのない財産となることでしょう。それを与えて下さった献体の先生に今一度感謝を捧げ、そして先生方が誇れるような医師になれるよう努力を重ねていきます。三か月間本当にありがとうございました。

積み重ねてきた生を遡る旅

星　佳佑

まず初めに、お体をご提供くださった先生方、ご家族の皆様、白菊会の皆様方に、深く感謝を申し上げます。

最初に白菊会の方のお話を伺ったとき、とても衝撃を受けたことを覚えています。献体は医学のため無条件無報酬で行われるというだけでなく、お体をご提供してくださるのを「喜び」とおっしゃり、この上なく崇高な奉仕の精神に、強い尊敬

と感謝の念を感じずにはいられませんでした。

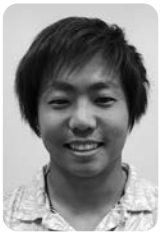
実習の初日、お名前も知ることのできない私たちの先生と対面したときの、そのご遺体の力強くたくましいお姿が印象に残っています。私たちの知らない時代に生まれ、私たちの知らない戦争を乗り越え、働き、何十年もの営みを成してこられた先生を拝見し、緊張や責任感とともに、先生のお体から多く深く学ばせていただきそれを活かしたい、という熱意が沸き上がるのを感じました。ご遺体に触れさせていただくと、冷たい重い。ご遺体は最初の患者さんであり、これからこの方をくまなく調べていくことになる。手に感じる重さ以上の重圧を感じました。

解剖を進めて、ご遺体の一つ一つの部分を明らかにしていくと、教科書では学んだものの実感がなかった知識が実質を伴ったものに変わっていきました。また、ご献体は教科書通りというわけではなく、人それぞれの本当に様々な違いがありました。「ご遺体は先生です」という言葉の通り、数えきれない学びを得ることができました。テキストだけではわからない人体の特徴や、先生のご遺体の個性を、実際に触れて学ぶことができました。筋肉、骨、脂肪、神経が先生のお体をどう支えていたのか。肌のしわや傷、病変部、手術痕からして、先生はどのような暮らしをしておられたのだろうか。すり減った軟骨は長年の生活を支えていたのだろう。ご遺体の一部分一部分から、先生について思いを巡らせました。また、珍しい特徴もあり、得難い知識も得られました。正常解剖は、一人のご遺体を開き分け、構造や特徴を把握しながら、一つ一つの器官、組織にまで遡っていくものであり、解剖を通して、たった一つの受精卵からここまで複雑な体を構成して長い間生の営みを行える人体の神秘を実感しました。また、この解剖学実習は、まさに先生の積み重ねてきた生を遡る旅でもありました。約三か月間という期間ではありましたが、ご遺体をここまでよく見る経験ができて深く感謝しています。

この解剖学実習を通して、数多くのかけがえのないものを得られました。この経験は決して忘れることはないでしょう。医療人として先生に恥じないよう精進し、恩返ししていきたいと思います。最後に、この貴重な機会を与えてくださった、ご献体してくださった方々とそのご家族の方、および実習に関わったたくさんの方々に深く感謝の言葉を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

肉眼解剖実習の厳かな環境

結城　駿



まず初めに、我々医学生に肉眼解剖実習という学びの場を提供していただいた白菊会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。私は医学を学びたいと思い至った時から、この実習を心待ちにしていました。その当時はどのような方が献体として我々の「先生」になってくれるのか、また白菊会のような組織があるということさえも知らず、ただ漠然と実際にこの目で人体そのものを見てみたいという好奇心だけを持っていました。そしていよいよ肉眼解剖実習が始まるという時期に初めて、白菊会の方々がどのような人生を経て献体の意思を持ったかなどの生の声を聴き、献体の精神の尊さを学びました。そして我々医学生のためにたくさんの方々が協力してくださっている実態を知り、もっと気を引き締めて取り組まなければいけないなと思いました。肉眼解剖実習を通じて実際に目で見る、触る、動かしてみるなど、教科書や医学書からは学べないことを直接学べる素晴らしい時間を過ごすことができました。

最初は、献体に自分のような何もわからない者がメスを入れていいものなのかと不安に思いましたが、この実習を通じて学ぶことで、将来役に立つ知識を得ることができるのだということに気付き、幾分気持ちが楽になりました。しかし実際に実習は大変で、筋肉や脈管の同定※、臓器の機能の把握などたくさんやらなければならないことがありました。このような難しい作業の中でも、献体してくださった方への感謝の気持ちを忘れずに、常に謙虚な気持ちで取り組むことができたのは、実習前の事前講義から実習中の質問対応など様々な形でサポートしてくださった教官の方々がしっかりと肉眼解剖実習の厳かな環境を作ってくれたからだと思っています。また肉眼解剖実習を通じて、こんなにも細い脈管がからだ中を駆け巡り臓器を栄養している、こんなにも小さな臓器が生きていくうえでとても重要な役割を果たしているなど、人体の神秘に直接触れることができ、自分の体をもっと大事にしようと思ったと同時に、医師になった時は自分の体と同じように患者さんの体を大切にしていこうと思えるようになりました。将来どの科に進むかはまだ分かりませんが、今後いろいろな医学に触れて自分の進路をしっかり決め、そしてどの科に行ったとしても今回の肉眼解剖実習で得た知識や他者に対する考え方をしっかりと持って、患者さんに尊敬していただけるような医師になりたいと思っています。しっかりと世の中に恩返しができるように頑張ります。ありがとうございました。

毎回の黙とうで対話

磯部琴絵

一年生の頃、先輩方の解剖実習のお話を漏れ聞いて、いつか自分もするんだなと思いつつもイメージが沸かず、遠いことのように思っていました。しかし、あっという間に解剖実習が始まり、終わるまでも本当にあっという間でした。それまでの一年半の講義は、さぼっても自分が後で取り返すのに苦労するだけでしたが、解剖実習は違います。御遺体を提供してくださった心に報いることができるのは班員四名だけだからです。そして、教科書のようにいつでも読み直せる訳でもありません。この時間の中で精一杯吸収しなければ、と身の引き締まる思いでした。

初回の実習は、不安と緊張が大きすぎて、班員が課題を進めていくのを横で追いかけるだけで精一杯でした。これではいけないと思い、教科書やアトラスを使い、必死に予習復習に励みました。初めての解剖学実習で疲れて寝てしまいそうになることもありましたが、御遺体の先生の想いを考えて、自分を奮い立たせていました。

回を重ねるごとに、教科書の絵と実際の御遺体の見方や予習のポイントも分かるようになりました。初めて自分で神経を同定できた時、とても嬉しかったことをよく覚えています。

実習最終回、御遺体の先生をお送りする時は、先生に対する感謝の気持ちでいっぱいでした。もちろん本当にお話しすることはできませんが、毎回の授業で黙祷を捧げるとき、実習の成果を心の中でお話ししていたので、とても身近に感じていました。

私は今回の解剖学実習を通して、本当に多くのことが学べたと思います。実際に自分の目で人の身体の隅々まで見て、その構造や機能を学んだことはもちろんですが、医師という職業の難しさや重さのようなものを改めて認識することができました。医師という職業は、患者さんなどのその医療を受ける側の人がいては

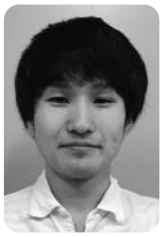
※同定：神経や血管などの名前を決定すること

じめて成り立つもので、患者さんにとって自分の身体は唯一無二で、何よりも大切なものといって良いものです。だから、医師は常に患者さんにとって最良の選択をできるよう努めなければなりません。今回の実習で、人の命を扱う仕事の重みを再認識しました。今回学んだことを、将来医師として働く上で活かしていけるよう、今後も勉強に励みたいと考えています。

また、最後になりましたが、このような学習の場を与えてくださった御遺体の先生や、講義や実習で私達が最大限吸収できるようサポートしてくださった環境生命医学教室の先生方に本当に感謝しています。ありがとうございました。

不安を乗り越えて得たもの

土屋　太一



二月十九日の金曜日の納棺式をもって解剖学実習の全てが終わりました。

振り返ってみると、医学部入学前から私は解剖学実習を不安に思っていました。人体にメスを入れるという体験は日常離れしており、医学部入学後も本当に自分にそのようなことが出来るだろうか、恐怖で倒れてしまうのではないかと思っていました。そして初めて遺体の先生を前にした時に、いろいろな思いが交錯していたのを覚えています。ご健在だった時のご家族とのやりとりや、街で私と同じように生活する先生のお姿などを自然と想像していました。もしかしたらどこかで会ったことだってあるかもしれません。そのように、私たちと同じ人間である先生のご遺体に初めてメスを入れる時はやはり恐怖感が強く、大きく深呼吸をしてから、決心して背中にメスを入れたのを覚えています。作業に慣れるうちに、初めのような恐怖感は無くなってきましたが、頭部の解剖が始まったときはなかなかメスを入れることができなかったのを覚えています。先生の顔から献体への強い想いが伝わるようでした。解剖学実習を進める中で、血管や神経など人体の構造の複雑さ、精密さに驚きました。実習書で学んだことであっても実際にその部位を特定するのは難しく、紙面で学ぶのと、直接人体で学ぶのは全く異なることなのだと知りました。またその中で医学生としての自覚が芽生え、医師になりたいという気持ちが大きくなっていきました。

以前は先生のご遺体でしっかりと勉強することでその意思に報いることができると考えていましたが、解剖学実習を終えた今となっては、私が医師となり、よい医療を提供できたときに初めてその意思に報いることができると考えるようになりました。そのためには、解剖学だけでなく他の医学についても熱心に勉強する必要があるし、私にはその責任があると思います。この先、私が一人前の医師として社会に貢献するまでの道のりはとても長いものであり、苦しいことも多いと思いますが先生に対し顔向けできるように、努力を怠らず自己研鑽していきたいと思います。

最後になりますが、ご遺体を提供してくださった先生、それに同意してくださったご遺族、白菊会をはじめ関係者の方々、熱心に指導してくださった先生方には大変感謝しております。本当に有り難うございました。

「先生」に励まされて

ケイランディシュ フォアド

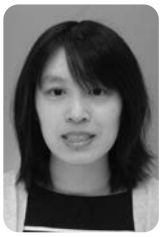
解剖学の実習は私が医学部で最も経験したい事の一つであった。人体の複雑で精巧に作られたその仕組みを自分の目で見て確認することができるものである。実は私の親は医師で海外の大学の医学部を卒業したが、その時は刑務所で亡くなった方などの身寄りのないご遺体を使い勉強したと聞いた。ご遺体の数には限りがあり、専ら指導者が解剖しながら説明するのを、多くの学生が周りを囲んで観察するというものであったらしい。解剖学の最初の講義で四人一組につきご遺体の先生が一人付き、学生が主体となって解剖を行うことを知ってますます実習が待ち遠しく感じた。これほど環境に恵まれていい機会を得たことに感謝し、この実習をできる限り実りのあるものにしようと胸に誓った。説明会において白菊会の会員の方がどのようにして献体の登録を決意されたのかというお話が非常に印象に残っている。「死後の自分の体を使っていただき、医学生の勉強と医学の発展に少しでも貢献することができれば本望である。」とおっしゃっていた。無条件・無報酬で献体をすることは並大抵の決意ではないと思う。ご家族、ご親族の方をみな説得してやっと献体の登録ができるので、人によっては大変な苦労をして自らの身を捧げてくださっているのだ。医学生として解剖学を学ぶということはただ体の構造に関する知識を入れるだけではなく、ご献体をされた方の思いを叶えるためにも、医学にまた社会に貢献しなければならないという医師の責務を学ぶことでもあった。

今、第一回目の実習を思い返してみると、目の前に横たわっていた「先生」のお姿をはっきりと思い出すことができる。私はこれから学ぶことができる人体の神秘への期待を持っていた。しかし、それと同時に「先生」のお体、特にお顔を拝見すると、これから私は人間を解剖するのだという大きな緊張感に襲われた。一番初めにメスを入れるときは緊張で手が思うように動かすことができなかった。心を落ち着かせようとして深呼吸した後、ふと「先生」のお顔を見ると、なぜか「一所懸命にやりなさい」と励まされているように感じてその後はスムーズに解剖を進めることができた。解剖というのは実際にやってみると思っていたほど簡単なものではなく、探しているものがなかなか見つからず心がくじけそうになることもあったが、最初の決意を思い出して最後まで全力で取り組めたと思う。まだまだ医師への道は遠いが、この思いを忘れず今後も精進していきたいと思う。

最後に改めてこの機会を下さったご献体の先生方や白菊会、医学部の先生方に敬意を表したいと思う。本当にありがとうございました。

将来のチーム医療を連想

町田 蓉子



私は医学部を志望すると決めたとき、ただ一つだけ不安なことがあった。勉強でも体力的なことでもない。それは、解剖実習であった。幼い時から漠然と医師を目指していたものの、高校生の半ばくらいまでそのことが気がかりであった。大学説明会のときに伺ってみようと思ったこともあった。もちろん医師になる上で誰しも通る道であり、大切な勉強の場であると分かっていたが、いささか不安であった。御遺体を目の前にするというのがどのようなものか、どのような心境になるのか。

死についての経験の浅い自分にとっては、未知の領域に踏み込む怖さを感じていた。そして、私はそのような気持ちをほんの少し抱えながら覚悟を決めて医学部に進んだ。

いよいよ解剖実習が始まる少し前に、白菊会の方がいらっしゃって献体について語って下さった。医学の発展に貢献したい、もしくは病気で苦しむ人を助けるために、といった様々な思いを持っていらっしゃることが身に染みて感じられ、ますます医学生として身が引き締まる思いがした。その思いからか〝こわさ〟も次第に薄れたように感じた。しかしやはり初めは緊張感に包まれた。ふと、ご遺体のお顔を見るととても安らかな表情をしていた。この方にも人生がありその中で献体を希望してこられたのだろうと思い、これからの私たちの〝先生〟として励ましてくれているような気がした。

解剖実習は体力を要し、また毎回予習も必要なので、ハードな日々となった。しかし、ハードといっても、一度予習をした後実際に御遺体を確認すると様々な発見があり、刺激を受けた。なかなか実習書通りにはいかない場面も多く、その度に他の班や先生に聞きに行くことで勉強になった。勉強する上で印象的だったことは、身体の仕組みというのは非常に良く出来ているということである。余計な要素はほとんどなく効率良くできているのだ。また、教科書的な平面ではなく、立体的なイメージがつかめるようになり、身体の見方がすっかり変わった。筋肉の配置や血管の走行などが浮かぶようになった。

解剖実習で学べた大きなことがもう一つある。それは班員とのチームワークとコミュニケーションだ。個性の異なる四人が次第にコミュニケーションを通じて仲を深め役割分担することができるようになり、将来のチーム医療を連想させられた。

そして、長かったような解剖実習はあっという間に終わり、献花式を迎えた。初めは不安ばかりだったが、実習を終えて多くを学び自信がついたと思う。ここで学んだことを活かして一歩ずつより良い医師に近づいていきたい。最後に、ご献体くださった方とご家族の方々、指導してくださった先生方に心から感謝いたします。本当に、ありがとうございました。

濃密な実習の時間を終えて……。

私に託されたもの

依田夏美

解剖実習が始まるまでは、解剖に対して単純な好奇心や勉強についていけるかという不安がありましたが、ご献体で勉強させていただくということについてあまり深く考えたことはありませんでした。しかし、解剖実習初日に、初めてご献体の先生に向き合った時、これから始まる勉強はご献体の先生方が私達にくださった、二度とない貴重な機会であると身が引き締まる思いがしました。

解剖実習では、自分たちで同定を進めながら人体の構造を隅々まで学ぶことができました。解剖実習で得た知識と経験は実際に解剖しなければ得られない貴重なものでした。私は、自分の手や足や腹部を見て、触れながら、自分の体も同じようになっているのだなと実感し、不思議に思いました。

ところが、同時に目の前のご献体の先生も私と同じように生きて、日々いろいろなことを考え、悩んだり、大切な誰かと笑いあったりしていた方なのだということに思いあたりました。そして、実習に取り組みながらも日々、勉強のためとは言え、ご遺体にメスを入れて本当に許されるのだろうかと、とても悩みました。そんな頃、解剖学の先生が講義の中で、「ご遺体の先生がこれから先ずっと君たちを一番に応援している、だからご遺体の先生に恥じないように励みなさい。」と、おっしゃいました。その言葉を聞いて、私はご遺体の先生の思いに気が付きました。ご遺体の先生は、自らの肉体を私たち医学生の勉強のために差し出してくださいました。それは、私達への期待であり、医療への期待と信頼であり、自分の生きた次の時代の人々の発展と幸福を願う崇高な思いです。ご献体の先生方はまだ見ぬこれからの医療がよりよくなるように、という願いを私たちに託してくださったのです。勉強の場をいただいた私達はその思いに応えなければなりません。

自らの体を献体するという決断は、とても重いものだったに違いありません。そして、その決断に同意し、大切なご家族のご遺体を私達に提供してくださったご遺族の方々の思いも大変なものだったでしょう。それでもご献体してくださったのは、解剖実習で勉強させていただいた私達が、医療を担うものとして、多くの人の力になっていくだろうことを信じてくださったからでしょう。私達はその信頼に応え、大事なご遺体で勉強させていただいたご恩に報いる責任があるのだと思います。それは、医学生として真剣に勉強に励み、医師として精進し、医療の発展に尽力することです。

社会への貢献を願ってご献体してくださった先生の意思を継いで、ご献体の先生の分も私は頑張りたいと強く思いました。ご献体の先生への感謝を生涯忘れずに、困難な時はご献体の先生が応援してくださっているだろうことを思い出して働いていきたいです。

心を大切にする良医になりたい

野田　万里子

先日、納棺式をもって約三か月にわたる解剖学実習がついに終了を迎えました。班員と協力しながら必死で各臓器・器官の剖出と同定を繰り返すうちに嵐のように過ぎていった三か月間でしたが、いま振り返ってみると、あらためて得たものの大きさに驚きます。以下拙い文章ではありますが、実習を通して学んだことや感じたことを記させていただきたいと思います。

解剖学実習の初日、ご献体を前にしたときの独特な緊張感は忘れることができません。私は亡くなった方を拝見するのも身内のほかではほぼ初めてで、献体してくださった方やそのご遺族の尊いお気持ちにきちんとお応えできるのかという不安を抱いたこと、同時に自分が志している医師という人間の生命に直接触れさせていただく職業の責任の重さを改めて痛感したことを今でも鮮明に覚えております。

解剖を通して、まず人体の構造の緻密さや精巧さに感動しました。筋肉や臓器

の配置や構造、神経や脈管の走行、その他とても覚えきれないと感じていた数多くの内容が、実際に解剖をさせていただいたことですんなりとよく頭に入ってきたと思います。

さらに、教科書との違いが思っていたよりもはるかに多くまた大きいことに驚きました。私の母は医師なのですが、ひとりひとり違う患者さんについて、よく「人間の体は小宇宙だから」と喩えて言います。解剖させていただいたほかの班のご献体を見ても実に千差万別で、座学だけでは至らない人体の複雑さや奥深さを実感することができました。「理論と実践の間には大きな隔たりがあり、人の体は必ずしも教科書通りにはいかない」――このことを直に学ばせていただけたことは、これから医学を学んでいく上で、さらには将来患者さんの治療に携わる上で非常に大きな収穫であると感じています。

また実習後、白菊会の方々とお話しさせていただく機会があったのですが、このとき「病気だけをみるのでなく、患者さんの目を見て、言葉に耳を傾けるお医者さんになってほしい」とのお言葉をいただいたことが印象に残っています。ご献体いただいた皆さまの尊敬すべきご遺志に恥じぬよう、今後の勉学への決意を新たにするとともに、患者さんに向き合い痛みに共感できる、心を大切にする良医になりたいと強く感じ、身の引き締まる思いでおります。

解剖学実習は、医師を志す私たちにとって本当にかけがえのない経験になりました。今回の実習で得られた知識や技術、またその他すべてのものを糧として、真摯な気持ちで努力を重ねていきたいと思っています。最後になりましたが、このような有意義かつ貴重な機会を与えてくださった献体された白菊会の皆さま、ご遺族の方々、熱心に指導してくださった先生方、解剖班の仲間、その他今回の実習に関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

医学薬学府 修士課程感想文

人生の糧となる貴重な体験

佐久間　千　愛

始めに、医学を学ぼうと志す私たちのため、献体というかたちでかけがえのない機会を提供してくださった献体者の方々、ご家族の方々、また、この講義の実施のためにご尽力くださった白菊会の皆様、解剖学教室関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

私は以前から生き物の構造、特に人体の仕組みに関心があり、教科書やインターネットを用いて学習を進めていました。自分に最も近いこの体を何も意識することなく日常的に動かし、呼吸し、物を食べ、思考しているけれど、それらが行われるために人体はどのような構造をし、各部位がどのような機能を持っているのか知りたいと考えていました。現在はインターネットや3DCGの技術も発達し、ネット上でモデリングされた人体の構造をあらゆる角度から観察することのできるサービスがいくつも利用可能になっています。学習を進めるうち、これらの部位が実際の人体の中でどのような位置に収まり、どのような外見をしているのかなど、実際に人体を直接見なければ学ぶことのできない内容を知りたいという気持ちが強まっていきました。

私ははじめ園芸学部という農学系の学部に進学。しかし自分の研究したいことを選択していくうちに、気が付けばここ千葉大学大学院医学薬学府で医学の研究を行っていました。ここで開講される講

義の中に解剖実習があると知ったのは入学してからの事で、この機会を逃してはならないと受講の登録を行いました。

実際にご遺体と対面し授業を受けている間は、おそらく今後の人生で二度と体験することはないであろう機会を十二分に活かすべく無心に観察やスケッチを行いました。初めて目にする人体の内部は、本やCGのきれいに整理され一般化されたモデルとは異なり、様々な組織が複雑に絡み合い、それぞれが異なる質感や構造、感触を示し、時には個人に特異的な変異が観察されたりなどと新しい発見の連続でした。ご遺体の観察には合計約9時間の時間が設けられていましたが、どれだけ観察しても足りないと今でも名残惜しく感じます。

講義を終えて約一週間経った現在、強く感じるのはこのかけがえのない経験を与えてくださった献体者の方々や関係者の皆様への感謝です。私事ではありますが、何の巡りあわせか、実習を終えて帰ってきた日の深夜、祖父が逝去いたしました。私にとっては初めての肉親の死で、解剖実習と合わせ、深く死について考える七日間を過ごしました。遺体との対面から火葬を経て、遺体というものは例え既に命を失っていようとも、遺族にとっては本人と何ら変わりなく非常に大切な存在なのだと深く感じました。献体をするという本人の決意、またそれを受け入れる親族の方々の決意はどれほどのものか、想像を絶するものだと思います。そのような決意、多くの人の尊い思いのもと、私は三日間の授業を経験させていただいたということを深く胸に刻み、決して忘れません。

細部一つひとつに目をこらし観察

岡本　洋子

修士一年の入学時から三日間のこの授業を学ぼうと考え希望したのですが、授業の日程が近づくと、その責任感から緊張感が増していったのを覚えています。実習前の授業で、先生方から解剖学の基礎知識と、それ以上に力を入れて、実習に臨むにあたり心構えを真剣に教えて頂きました。

一日目の午後、実習前のオリエンテーションで、千葉白菊会の皆様から、大学の医学・医療の教育・研究のために、自らの意思のもと、無条件・無報酬にて献体を希望されたとのお話を聴き、本当の意味での奉仕の精神、無償の愛というものを教えて頂きました。また、会員の皆様から献体に至る背景・動機をお聴きし、お一人おひとりが、これまで生きてこられた人生があり、お亡くなりになった後でも「人の役に立てる」と献体をご希望されたお考えに、敬意を表する以外に何も言葉が見つかりませんでした。ご家族の同意無しでは登録がなされない現状も知り、多くの皆様の勇気と熱意あるご協力によって、この実習が成り立つことを改めて思い知らされました。

千葉白菊会会長の大澤様から、これから実習に望む私達に向けて「幸せになりたいなら、人の役に立つこと。そして、他者（患者さん）への思いやりを忘れないこと。」「皆さん頑張ってください。我々の願いを叶えてくれるのが皆さんなのだから、ありがとうと言いたい。」と、期待と思いやりに満ちたお言葉を頂きました。もう一つ、私の胸に響いたのは、森先生からの、千葉白菊会の皆様が献体としてお役目を全うして荼毘に付されご自宅にお戻りになられた時に、ご家族が「お帰りなさい」と言って迎えるのだと。そのお話を聴き、強く心が揺さぶられ、頬を涙がすっと流れていきました。

実習の時間はとても神聖なものでした。一礼をして実習室に入室し、黙祷を捧げながら、初めて目にするご遺体は衝撃的

でした。ですが、学生達に対して熱意をもってご説明頂く先生方と、積極的にご遺体に触れ観察する意欲あふれる他の学生達を見て、私も背中を押され、先生方から聴いた「先生はご遺体である」という言葉を思い出し、勇気をもって「学ばせて頂きます」という気持ちで観察させて頂きました。

実際に肉眼で観察した人体の構造や機能は、実に神秘的で、精巧であり、その素晴らしさに感動しながら、細部一つひとつに目を凝らし観察しました。ご遺体によっても構造が異なり、その違いまでも学ばせて頂きながら、その方の人生を垣間みることが出来たように思います。

二度目の解剖授業を終えて

中嶋　隆裕

私が解剖の授業を受けるのはこれが二度目でした。最初は十年以上前になるでしょうか、千葉大の看護学部に在籍していた時に解剖の授業を受けました。御献体の見学は一度限り、一～二時間でしたが今でもその日見た光景は忘れることができません。

私たちの体の中にはこんなに大きな臓器や血管があり、神経もとても太いものが走っているということは、実際にそのものを目にしないと分かり得ないことだったと今でも思います。特に体の中心に走っている大動脈や大静脈がホースのように太かったことが印象深かったです。

時は過ぎ、私は看護師として今まで八年間患者さんのお世話をしてまいりました。故あって大学院に進学した折に解剖の授業があると聞き、これは是非参加したいと考え今回に至ります。なぜなら病院で患者さんと関わる際は体の内部は見えないままで採血をしたり、痛みの部位を探ったり、体の中での病状の変化を想像したりと患部が直接見られたらいいのに、という思いが多々ありました。今回参加しようと思った理由はまさしくそれで、今まで疑問に思っていたことを解決するカギになる、そう思ったからです。

初めての解剖の授業の時とは違い今回は採血する部位の神経の走行が見たい、中心静脈カテーテルは実際どのようなところから入れられているのか知りたい、などといった具体的な目標をとても多くもって参加したため、さらに有意義で明日からでもすぐに臨床に活かせるような素晴らしい体験ができたと思います。

また今回、何よりも印象深かったのは御献体として今後ご協力していただく白菊会の方々のお話と思いを直接聞くことができたことです。最も印象に残っているのは「献体となることで医療に貢献できて私達も嬉しいんだ、ｗｉｎ－ｗｉｎの関係なんだよ。」という言葉です。笑ってそう話されましたがこれは誰にでもできることではありません。お話にもあった通り、ご本人だけではなく周囲の方々の賛同も得るというのは非常に困難ですし、何より死後自らの体を差し出すというのは医療に対する究極の奉仕であると思います。我々医療者もそうですが、患者さんが病気から回復し、笑顔になられることを至上の命題、そして喜びとして活動しています。献身的に、という言葉がありますがまさにそういった意味で白菊会の方々は我々の先生であり、医療に対する思いにおいては同志であると感じました。

今回の授業で白菊会の方達から頂いたお言葉、そして御献体から学んだことは初回の授業の時と同じくこれから一生忘れられない貴重な経験となりました。御献体の方々の意思に応えられるよう日々勉強に、臨床に精進していきたいと強く考えております。

看護学研究科 博士課程感想文

ご遺族の思い念頭に実習に取り組む

本谷 由香里

今回、肉眼解剖学特論を受講することになり、解剖生理の再確認をする機会となった。解剖実習は大学1年時以来であり、当時、私の大学は看護学部しかなかったため近くの医大まで実習に行ったが、その時の解剖実習で見せてもらった献体の記憶はほとんどない。そこで、今回、大学院での集中講義を受け、再度、学習し直すことにした。

授業では、解剖生理の講義はもちろん、この実習が行える経緯まで知ることができた。実際、献体がどのようにして行われているのか、献体として提供してくださったご遺体があることで、この講義を行えているということを、この講義を受けるまでは知ることはなかった。献体が行われる過程で、ご本人はもちろん、二親等内の親族にまで同意確認を行っている話はとても印象に残っている。この話を伺って、大切なご家族のご遺体を、学生の学習のために提供してくださったことは、感謝しなければならないと実感させられた。私は、祖父母が亡くなった際、亡くなった後から火葬に至るまでの過程をきちんと見送ることができている。この最後の別れをきちんと行ったことで、大切な家族との別れを受け入れることができているのだと、今でも実感している。しかし、しかし、今回、解剖実習を行うことで、献体として提供してくださったご本人、およびご家族は最後の別れは、たとえ献体に同意されたとはいえ、どこかで気がかりになっている可能性もあるだろうと思っている。実際、白菊会の方々の話を伺ったことで、そのようなご遺族の思いを配慮しながら、実習に取り組む必要があると考えられたし、それらを自らも念頭に入れ、実習に臨むことができたと思っている。

今回の解剖実習は、解剖生理を再確認するだけでなく、実際のご遺体に触れることで、ご遺体を献体として提供してくださったご本人だけでなく、それを受け入れてくださったご家族が私たちのような医療従事者の学ぶ機会を提供してくださっているということを再確認することができた。先生方をはじめ、白菊会の方々、ご遺体として献体してくださったご本人およびご家族の方々、本当にありがとうございました。

尊いご遺志を看護の実践に生かす

金井 友佳

解剖学実習でご遺体の方々と向き合っている折々に、「この方は生前、どんなことを思い考えながら、どんな生活をしてきた方だったのだろうか」という問いが浮かんでいた。それはきっと、ご遺体に向かう前、白菊会の方々の一人の人としての人生経験や、献体をしようと決めたきっかけ、献体を決めてからの家族との様々なやり取りについての生の話を聞いたからだと思う。そのようにご遺体と向き合っていると、人間として共通しているものとして学んだ身体内部のつくりに、それぞれ個別性があるということに気づかされた。そしてその個別性は、その人の生活過程により作られたものであり、個別性もまた生活過程に影響していたのだ、と感じられた。私は病院の看護師として臨床経験を経て大学院に進学したのだが、臨床の場においては出会った方を一人の人ではなく「患者さん」として捉えがちであった。このような捉え方は、入院理由である疾患をその人の中心とし、行われる治療に重点を置いた、限局的な捉え方であった。もちろん、治療の場である病院では、疾患をとらえることも治

療を遂行することも非常に重要なことである。しかし、看護の祖であるナイチンゲールは「生活過程を整えること」を看護の専門性としており、今回の解剖学実習で実感した、体を見つめたときに、その人の生活過程の中でつくられてきた部分、生活過程に影響している部分を想像することこそ、本当に看護師が持つべき視点なのだと思った。

そして卒後、臨床の場に戻り患者さんや家族と向き合った時、あるいは看護教育に携わるようになった時、今回の実習で学び取った感覚を働かせ、向き合った方の生活過程を踏まえた看護実践や、看護実践に関する教育ができるようにならねばと感じた。それによって、医療の発展に貢献したい、役に立ちたいと願ってご献体くださった方々の遺志を継ぎ、さらに後世にもその遺志をつなげていくことができるのだと思う。

他者への思いやりの精神を体現

小村文乃

私は保健師として、地域での疾病予防の活動をしています。実際に人体の構造を目で見ることで、これまで学習した人体の構造や疾患の知識と合わさり、健康を保つからだのしくみの緻密さ、そして不調やつらさを訴える人々の身体の中で何が起きているのかを、より具体的にイメージできるようになりました。生活習慣病などの疾患は、自覚症状が無いことがほとんどです。病気でつらい思いや不自由を感じている方々やご家族の中には、「予防できていればよかった」と後悔を口にする方もいます。そうした後悔や、つらい思い、不自由を未然に防ぐには、自覚症状の無い方にも、ご自身の身体の中で何が起こっているのか理解していただき、予防のための行動に価値を感じていただくことが重要です。また、子どもの頃から、からだの健康が保たれる仕組みを学習することも大切だと思います。私は今回、実際に人体構造を目にして詳細に学習することができました。この経験を活かして、人体の仕組みや予防の必要性を伝えて疾患予防を支援したり、人々の生活やご希望にあわせた健康づくりを一緒に考えていきたいと思います。そして、多くの人が病気で制限を感じることなく、ご自身の希望する、充実した生活を送るサポートをしたいと感じました。

解剖実習に先立って、白菊会の皆様から献体をなさる動機と、このような心境に至るまでの経験についてお話を伺いました。この経験から、「医学的根拠に基づきながら、対象者がこれまで過ごした人生や思いに寄り添って健康づくりのサポートする」ということを、実感を持って学ぶことができました。ご遺体と対面した際、「この方にはご家族があり、様々な経験をされた、一人の人間なんだ」という強い実感を得ました。そして、どのようなお仕事や生活習慣の方だったのだろうか、どんなご病気を患っていらっしゃったのか、晩年をどう過ごされたのかを想像しながら、お身体を拝見しました。このことは、人体構造を学習するという範疇を超えて、大変貴重な経験だったと感じています。

白菊会の皆様には、職業人としてだけでなく、個人としても感銘を受けました。様々な人生経験を重ね、ご家族やご友人を大切にし、「医学のお役に立つという生前の喜びを生きがいとする」ことが喜びとお話しになった皆様は、人生の結びに無償の奉仕を選択された方なのだと感じました。他者への思いやりの精神を体現する白菊会の皆様とそのご家族、実習でお世話になったご遺体に、尊敬の念を抱くとともに、私自身も他者を思いやる人間でありたいと思いました。

教育の取り組み

覧システム」32台が寄贈され、医学生の解剖実長である鈴木崇根先生が、千葉大学医学部に

大澤会長から中山医学部長へ
「画像供覧システム」の贈呈が行われました
（50周年記念式典）

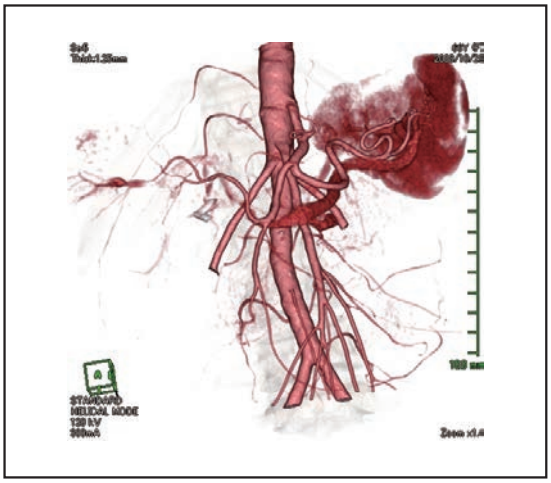


図１　臨床画像

進化し続ける解剖学教室
～卒前教育から卒後教育まで～

千葉大学大学院医学研究院　環境生命医学　鈴木　崇根

医学は日々進歩しており、医師は学生時代から医師のキャリアを終えるまで生涯学び続けていかなければなりません。解剖学教室も同様に、医学の進歩に併せて進化する必要があります。私たちの仕事は、お預かりする白菊会の皆様のお体を、人の体から学びたいと願うすべての人々へ繋ぐ「学びの場」を提供することです。千葉大学の解剖教育における先進的な取り組みをご紹介致します。

医学生のために基礎解剖学から臨床解剖学へ

生物としての人のからだの理解だけでなく、疾患の解明や治療にその解剖学的知識がどのように役に立つのかを知ることは、医師を目指す上でとても大事です。

一般的に肉眼解剖学の教員は生物としての人体構造の専門家ですが、疾患や治療といった臨床の知識はあまり持ち合わせておりません。そこで、私たちは附属病院で診療する臨床医に講師として解剖実習に参加してもらい、多くの臨床画像（図１）や手術動画などを通じて、臨床解剖学の知識を学んでもらっています。昨年までは解剖実習室には画像を見るためのモニターが無く、あくまで講義は教室で、実習室ではただ黙々と解剖をしていました。今回、千葉白菊会設立五十周年の記念品として画像供覧システム（図２）を寄付して頂きました。実習台１台ずつにモニターを設置し、自由に画像や動画を表示出来ます。これで直視による人体内部の観察と、臨床診断に使うＣＴやＭＲＩなどの画像を通じた観察が繋がり、疾患と治療の深い理解に繋げることができます。

献体の精神が生きる先進解剖学

千葉白菊会50周年記念式典では大澤國昭会長から中山俊憲千葉大学医学部長へ「画像供習にも大きな貢献を果たすと期待されています。ここでは環境生命医学助教で白菊会副会おける先進解剖学教育の素晴らしい取り組みについて、やさしく解説しています。

図２　画像供覧システム　　写っているのは動いている心臓内部のアニメーション

医師の生涯教育に寄り添う クリニカルアナトミーラボ（ＣＡＬ）

テレビで「神の手」などと言われる高名な先生がおられます。彼らは医師免許を取った時から「神の手」を持っていたのでしょうか。そんな事はあり得ません。高度な知識だけでなく、多くの経験を経て名医となっていくのです。これは身近な体験に置き換えてみるとよくわかります。皆さんがよく経験する料理で考えてみてください。本を読んだだけで美味しい料理が出来ますか？ ほとんどの人が、まず良い食材の選び方や調理法などの知識を蓄えます。それから実際に調理します。うまく行かなければもう一度行程を振り返ります。失敗しても少しずつ改良していくことで、上手になっていきます。でも臨床ではそうはいきません。失敗は患者の死や、障害を意味するからです。研修医は皮膚縫合から始め、少しずつ高度な手術や検査に取り組みます。十年目、二十年目ともなるとその時代の標準的な手技を身につけられます。しかし、凄まじい勢いで医療が進歩して顕微鏡、内視

図3

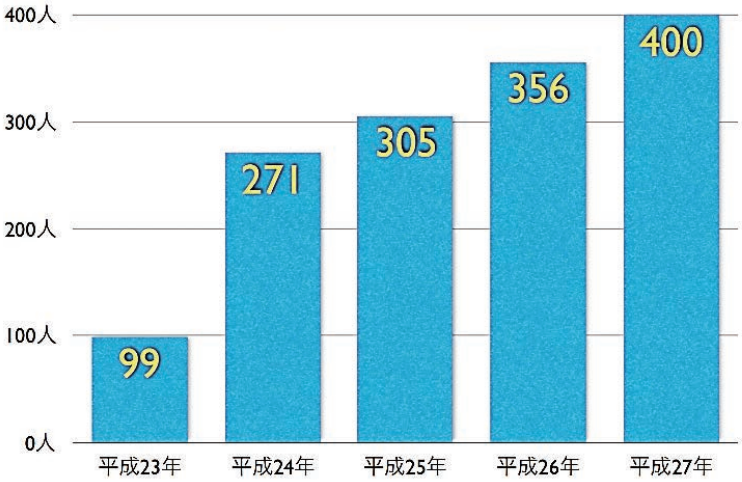


図4　CAL利用実績（参加人数）

鏡、ロボット手術などが開発され、肉眼では見ることが出来ない狭い領域で手術を行うことが可能となりました。患者にとっては福音ですが、医師にとっては大きな問題です。医療の進歩に医師の技術習得が追いつかなくなってきたのです。実は欧米やアジアでも、医師が少しでも早く確実に次のステップに進むために、献体を使って人体の詳細な解剖や手術の方法を学ぶための施設がたくさんあります。多くの大学や病院に、最新の手術にも対応できるような解剖室を備え、世界中から医師が参加して教育を受けています。

残念ながら日本では解剖に関する法律が、医師を育てる事を前提に作られておらず、医学生への教育だけで何十年も過ぎてきました。私たちは、このままではいけないと考え、千葉白菊会、医学部、環境生命医学、多くの臨床講座が一体となって医師の教育・研究のための施設「クリニカルアナトミーラボ」を平成二十二年に立ち上げ、積極的な活動（図3）を開始しました。このような活動が厚生労働省や学会を動かし、平成二十四年四月に「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」が、日本外科学会、日本解剖学会の連名で発行されました。今では安心して医師の教育も解剖を通じて行えるようになった訳です。千葉大学が全国に先駆けて医師の教育を実現出来たのも、当初より千葉白菊会の多大なご理解を頂けたからです。本当にありがとうございます。

CALの参加者は年々増加（図4）しており、現場のニーズが非常に高いことを裏付けています。私は参加する医師に、CALで学んだことを確実に患者さんに還元して欲しいと思っています。それが、献体を通じて頂いた崇高なお気持ちに報いる最高の方法だと思っています。そして、学生教育だけでなく、卒業して医師になった後も一生寄り添い、学ぶ場を与える解剖学教室であり続けたいと考えています。

白菊会の皆様、いつも変わらぬご支援をありがとうございます。よい医師を育てるために、今後ともよろしくお願い致します。

CALに参加した医師の感想

今後もぜひ参加できれば

千葉大学整形外科シニアレジデント
（後期研修医）　細川　郁

今回、県内の若手整形外科を対象に毎年開催されている千葉大学整形外科Cadaver Workshop（Hand & Elbow）に参加させていただきましたので感想を述べさせていただきます。Workshopには、事前資料の配布があり、実際の手技・解剖をイメージして予習ができました。しかし教科書で知識として頭に入っていても、実際に手を動かして腱や神経といった細かい構造物を扱うことは想像以上に難しいものでした。指導医の先生方にポイントやコツを教えていただきながら取り組むことができて、大変勉強になりました。手術手技については執刀という立場で経験することはまだ少なく、関節内注射等の手技も外来診療では必須でありながら今まで経験がありませんでした。今回のWorkshopを通して今まで上級医の先生方の手技を側で見ているだけでは生まれなかった疑問や自分に足りないものを多く感じることができました。今後もこのような機会をまた頂けるなら、ぜひ参加させていただきたいと考えております。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました白菊会会員の皆様、ご遺族の方々に深く感謝申し上げます。

貴重な経験に感謝

湘南鎌倉総合病院　外傷整形外科
對比地加奈子

千葉大学より当院で研修中の小林先生にお誘いいただき、「千葉手・肘の外科研究会　Cadaver Workshop 2015」に参加させていただきました。

用意された4つのコース（手・肘が2コースと、皮弁※が2コース）はどれも興味深く、まずはその選択に頭を悩ませましたが、①血管柄付き腓骨移植、②内側足底皮弁、③Wrap Around Flapという下腿・足部の皮弁挙上を学ぶ「Dコース」を選びました。

参加人数の都合で午前中は見学だったため、当初は別のコースを見学しようと思っていましたが、Dコースのテーブルで経験豊富な講師によるレクチャーが始まったため、そちらに釘付けになってしまいました。結果として、

1　解剖書・手技書による予習
2　実際の手技の見学とレクチャー
3　実際に自分で執刀
4　見学時に撮影した写真と手技書で再度復習

と、内容を絞り、濃厚な研修を行うことができました。

※皮弁：失った皮膚のため他から移植する皮膚

座学だけではどうしても学ぶことのできない、貴重な経験の機会を与えていただき、ご献体いただいた白菊会の皆様、およびご遺族の皆様に深く感謝いたします。

また、ご多忙の中Workshopを開催し、外部へも広く門戸を広げていただきました千葉大学國吉先生、鈴木先生、大学院生の先生方をはじめ、千葉大学整形外科学教室の皆様、誠にありがとうございました。

学外からの利用にも

千葉県こども病院　整形外科
及川　泰宏

今回、千葉大学医学部医学研究院Clinical Anatomy Lab（CAL）にて僧帽筋と肩甲骨の局所解剖をさせて頂きました。当日は私の他に、千葉大学出身のこども病院から四名、東北大学から一名、東京医科歯科大学から一名、千葉大学から一名の合計七名で参加しました。

先天性肩甲骨高位症（Sprengel変形）の治療には肩甲骨のみでなく種々の要素に対するアプローチが必要となっています。僧帽筋の局所解剖と肩甲骨の動きに与える影響を検討することで術式のさらなる改善が見込まれます。今回、その基礎となる肩甲骨と僧帽筋周辺の詳細な解剖をさせて頂きました。周囲の神経・筋肉との関係や、実際に肩甲骨を引き下げた際の僧帽筋の動きなど詳細に観察することができ、とても貴重な体験となりました。今回の経験はこども達に安全でかつ効果的な治療法を提供するのにとても役立つものと思われます。

今回学外の我々がCALを利用するのに当たり、環境生命の鈴木崇根先生には計画・申請の段階からご尽力いただき本当にありがとうございました。また日常の業務や研究でお忙しい中、準備をしていただいた千葉大学整形外科の先生方には厚く御礼申し上げます。

CALの理念にご理解いただき献体していただきました千葉白菊会の方々にこの場をお借りして参加者一同、心より御礼申し上げます。

遺体からの感染を防ぐ取り組みについて

千葉大学大学院医学研究院　環境生命医学　鈴木　都

昨年、環境生命医学教室では、今後遺体からの感染予防について白菊会と検討を始めることを総会や会報で説明しましたが、再度問題点を解説します。

御遺体に触れる遺族の方々が、遺体から感染する確率は非常に低いです。エボラ出血熱など体中から出血して亡くなり、かつ感染力が非常に高い疾患は、遺族が体液に触れた場合には、大変危険です。しかしそういった感染症はまだ国内で問題になってはいません。むしろ会員とその家族の関係では、死後ではなく存命中

に十分気をつけて頂きたいです。よく発症する感染症は、肺炎や腸炎であり、咳や吐物、下痢などの処理を通じて、吸入、経口で体内に取り込んだ際に感染します。つまり、手洗い、うがい、マスクといった通常の感染予防で十分です。

その一方で、解剖に関して十分に気をつけなければなりません。報道を通じてご存じの方も居ると思いますが、昨年東京渋谷警察署で拘留中の男性が死亡し、司法解剖が行われました。数ヶ月後に死因が肺結核だったことが判明しました。その後男性に関与した警察官十八人と、解剖に立ち会った医師七名が結核菌に感染したのです。このように結核に感染した肺を解剖した場合、御遺体は咳をしませんが、肺を直接メスで切れば空中に拡散し、吸入してしまう可能性があります。また同じように、肝炎やエイズなどの血液にウイルスが潜む感染症は、解剖する人がメスなどで手を切ってしまった場合に感染します。他にも大学病院のすぐ近くだからこそ注意を要する感染症（菌）があります。人間は体中、部屋中に数億の菌と一緒に暮らしています。そしてその中で、抗生剤が効く菌、効かない菌が共存しています。健康な方にはほとんど無害であり、皮膚や室内に常在し、人の手や咳等を通じて拡散していきます。非常に体が弱った時に、人はこういった菌に感染します。病院では、抗生剤で治療を行いますが、効く薬が少ない菌ほど治療が難しくなります。最近、現存する薬がまったく効かない多剤耐性菌と言われる菌が出現しており、病院では警戒態勢

に入っています。誰かの体についた多剤耐性菌が体の弱った患者に感染し、その患者の治療に当たる医師や看護師の手を通じてほかの患者へ感染するかもしれないからです。そのため、多剤耐性菌への感染が発覚した場合にすぐに病院内で隔離して治療する体制が作られています。

残念ながら会員さまが最後にこういった形で隔離治療された場合でも、現在の献体受入方法では、病院から詳細な病歴は得られません。体中に耐性菌が付いた御遺体が搬送されてくると、棺や衣類を通じて医学部の解剖室に拡散し常在化する可能性があります。そして学生や医師の体に付着し、病院へ運び込まれることになる危険があるのです。事前に情報の提供があれば、対処しやすいことは言うまでもありません。そこで今後死亡時に御遺族を通じて主治医などから感染症に対する情報を頂く方法を検討しています。詳細が決まりましたら総会・会報等で説明していく予定です。

注　この記事については、まだ正式決定していません。

第89回解剖慰霊祭が厳かに開催

百九柱の御霊に白菊の献花を

ゐのはな記念講堂に厳かな鎮魂歌が流れ、第八十九回千葉大学医学部解剖慰霊祭が行われました。平成二十八年十月八日、午後一時。ご遺族、ご来賓、医学部・医学薬学府・看護学研究科学生らに大学関係者、さらに千葉白菊会会員らおよそ五〇〇名が参列。見守る中、「開式の辞」に引き続き、今年度の解剖実習にお役立ちいただいた一〇九柱の「ご芳名奉読」があり、おひとりお一人に語り掛けるように全員のご芳名が読み上げられました。そして、森教授による「ご芳名録奉納」ののち、御霊に対し参列者全員で黙祷を捧げました。

この後、祭式委員長の中山俊憲医学部長、徳久剛史千葉大学長が相次いで追悼のことばを贈り、千葉県知事（代読）の来賓挨拶が終わると、学生代表医学部三年生中務由彦君が心のこもった「感謝のことば」を述べました。

慰霊祭の締めくくりは参列者全員による献花。故人の安らかな眠りを祈り、透き通るように白い白菊の花を捧げました。

会場では引き続き、遺骨返還式と文部科学大臣の感謝状伝達式が行われました。森千里教授から感謝の言葉とともにお渡しされたご遺骨は、ご遺族の暖かな胸に抱かれ、帰途につかれました。

森教授によるご芳名録奉納

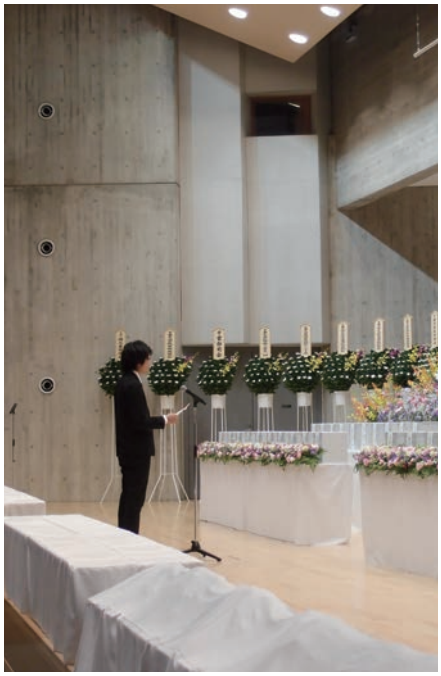
小雨の中 参列者が続々と…

中山俊憲医学部長が追悼のことばを送り、深々一礼。会場は厳かな雰囲気に包まれました。

参列者全員で御霊に黙祷、安らかな眠りをお祈りした。

式典の締めくくりには、すべての参列者が
透明に輝く白菊の花を手向けました。

文部科学大臣感謝状伝達式・遺骨返還式



感謝の言葉を述べる学生代表中務由彦君

千葉県医療整備課長が森田知事の挨拶を代読

ご遺骨は白菊会で用意した
風呂敷に包まれてお帰りになります

雨の慰霊祭でした

献体の願いを叶え家族のもとへ

待ちかねた妻や夫のお骨がいま胸に…

文科大臣の感謝状をおひとりお一人に

医学生たちも神妙に参列

総会・記念式典・講演会

（受付票代りの）封筒はお持ちですか？
お名前を確認してスムーズに受付出来ました。

祝電を いただきました

千葉白菊会設立50周年記念式典の開催を祝し、心よりお慶び申しあげます。これまでの半世紀に渡るご功績に深甚なる敬意を表します。千葉白菊会様のますますのご発展と、関係皆様のご健勝をお祈り申しあげます。

篤志解剖全国連合会会長　松村譲兒様

千葉白菊会設立50周年記念式典が盛大に開催されますことを心よりお慶び申しあげますとともに、献体運動における貴会の半世紀に渡るご功績に、深甚なる敬意を表します。千葉白菊会様の益々のご隆盛と皆様のご健勝でのご活躍を祈念申しあげます。

日本篤志献体協会理事長　佐藤達夫様

医学部学生　入場です

3月末退任の役員も

左から
森川晶夫前副会長
古賀操子前理事
近藤茂夫前理事
堀切慈前事務局長

お疲れさまでした

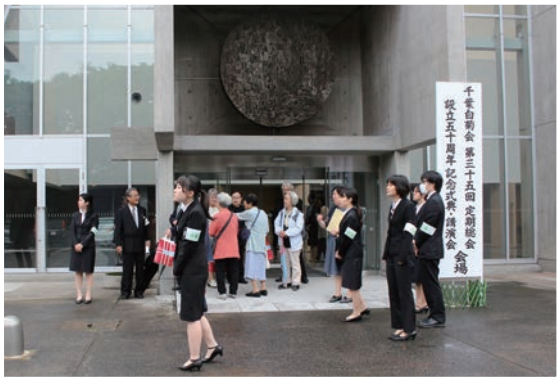
みんなで祝った50周年

総会で会計報告をする中島監事
左は司会の鈴木副会長

初夏のゐのはな記念講堂を感動で包み込んだ千葉白菊会設立50周年記念式典。それはまた、私たち白菊会会員と医学生・大学関係者や各界人との絆を新しく結びなおすきっかけともなりました。

私たち白菊会会員はみんなで式典を祝った喜びを胸に、その日が訪れるまでキリリッと生きてまいります。

やっと雨が上がりました。 気をつけてお帰りください。
また来年、お待ちしています。



㊤学生ボランティアの見送りを受けて
㊦バス３台で千葉駅まで送迎

千葉白菊会　この一年の活動

二月　医学部学生との懇談会開催

平成二十八年二月十九日（金）、解剖学実習最終日に学生と白菊会役員との懇談会を開催しました。

解剖学実習の納棺式を終えた医学部二年生が献体の碑に集合し、森教授、大澤会長の献花に合わせ感謝の拝礼を行いました。その後、五十九名の学生が学生食堂に集まり、白菊会役員と有意義な懇談のひとときを持ちました。

（理事　宇佐美幸子）

実習を終えて医師としての自覚を胸に……。

三月　篤志解剖全国連合会総会参加

総会

三月二十七日（日）早春の復興の街福島の〝ビッグパレットふくしま〟（郡山市）にて、大澤会長・鈴木副会長はじめ全国会員参加のもと、第四十六回篤志解剖全国連合会総会が開催されました。

全国献体成願者への黙祷から始まり、松村譲兒会長（杏林大学医学部教授）・開催大学の福島県立医科大学はじめ多くの来賓のあいさつがあり、役員改選（松村会長再選）、各種団体の報告と続き、平成二十七年度事業報告・平成二十八年度事業計画の承認と無事進行し、盛会のうちに閉会いたしました。

閉会後〝被災地見学ツアー〟が開催され、多くの会員の参加を見ました。

合同研修会

三月二十六日（土）　総会に先立ち「第四十回団体部会・大学部会合同研修会」が開催され〝**献体が支える解剖学教室―これからを見つめて**〟をテーマに長崎大学・東京医科大学・日本篤志献体協会から、献体によって支えられる解剖学教育の現状報告があり、多くの会員の共感と現状認識を得ることが出来ました。

（理事　鈴木和男）

六月　第三十五回定期総会開催

平成二十八年度の千葉白菊会総会は六月二十八日（火）、午後一時より千葉大学ゐのはな記念講堂で開かれました。総会は毎年一回、千葉白菊会の年間事業計画などが審議される大切な機会ですが、今年度は少し事情が異なりました。当日はこのあと設立五十周年記念式典が控えていたため、総会は心持ち早足で議事が進められました。会員百四十八名、付き添い三十五名が出席する中、大澤國昭会長の挨拶に続き平成二十七年度事業報告、監事による収支決算報告が会員の拍手により承認。さらに、平成二十八年度事業

計画（案）、同収支予算書（案）などが提出され、いずれも滞りなく承認されました。最後に、新メンバー四人を含む十一人の役員紹介があり、無事総会が終わりました。

（理事　野村烈男）

八月　マスターコースガイダンス参加

八月二十二日から修士課程の肉眼解剖学特論が実施され、三十五名が受講。ガイダンスは森教授の講義と献体についてのビデオ学習。白菊会の野村・水野理事と大澤会長による献体申し込みの動機と家族での取り組み体験が話されました。

（理事　酒井徳子）

十月　肉眼解剖実習ガイダンス参加

十月十四日午後、医学部第一講義室において平成二十八年度肉眼解剖実習ガイダンスが開催され、医学部二年生百二十名・教職員・千葉白菊会役員が出席しました。

鈴木崇根先生（当会副会長）の司会進行でガイダンス開始、森千里教授の講義・ビデオ学習に続いて、白菊会の酒井理事・青柳理事が献体の動機を語りました。大澤会長は戦争体験を交えて動機を話し、献体は無償の行為であることを強調し、心ある医師になってほしいと話しました。

最後に医学部長中山俊憲先生より「現在までに四九三〇名の学生が千葉白菊会を通して学び巣立っていかれました。千葉大医学部は〝心やさしい医師になる〟ことをモットーに挙げています。今日が第一歩です」という言葉で締めくくられました。

（副会長　宇佐美幸子）

献体の動機を語る酒井理事（10月ガイダンス）

どうぞよろしく
平成28年度 役員紹介

＊野村烈男理事
＊島本恭子前事務局長
酒井徳子理事
小宮山政敏理事
鈴木和男理事
＊水野佳子理事
鈴木崇根副会長
大澤國昭会長
宇佐美幸子副会長
＊青柳信子理事
（＊は四月一日就任）

山﨑昭子事務局長
（10月1日就任）

寄付者名簿

（平成二十七年十月～平成二十八年九月）

次の方々からご寄付を頂きました。ご報告かたがた心より御礼申し上げます。
なお、ご寄付いただきました金品は、本会の運営に使わせて頂きます。

（順不同）

芳名	住所
羽田辰生様	東京都
清子様	
伊東都様	八千代市
髙橋廣司様	千葉市美浜区
和子様	
井上和子様	東京都
大塚恵司様	東金市
匿名希望	千葉市中央区
匿名希望	山武市
佐分利梅子様	千葉市中央区
匿名希望	四街道市
田畑陽一郎様（千葉県医師会会長）	
島村圭三様	埼玉県
関洋子様	船橋市
関光旭様	船橋市
幸子様	習志野市
関絢子様	千葉市稲毛区
小林あい様	船橋市
八木福次様	
清美様	千葉市中央区
岩泉禮子様	佐倉市
中村アキ子様	船橋市
渡辺米様	千葉市美浜区
大塚三男様	鴨川市
康子様	船橋市
山口徳子様	船橋市
高井辰子様	旭市
飯田敬子様	安房郡鋸南町
森田一利様	千葉市中央区
冨樫里子様	我孫子市
土屋静江様	鴨川市
倉持房枝様	千葉市花見川区
鈴木正雄様	市原市
さか様	柏市
三浦みち子様	千葉市美浜区
石川つね様	千葉市稲毛区
水野なつ子様	成田市
飯島耕造様	富津市
根本しげみ様	
香取泰子様	
岡野正義様	
（千葉県アイバンク協会理事長）	
幸クニ子様	千葉市美浜区
小柏毎子様	山武市
大橋美恵子様	千葉市稲毛区
白石シゲ子様	船橋市
横山亨様	東金市
小川たま様	富津市

内訳

現金　六七八、四八〇円
切手　三五、二八八円

平成二十七年度事業報告書

平成二十八年三月三十一日

一、献体登録業務

㈠ 二十七年度の献体登録状況は次の通りである

26年度末在籍数		1,969
27年度状況	入会者数	136
	献体成願者数	92
	異動他	36
	増減数	8
27年度末在籍者数		1,977

（単位：人）

㈡ 在籍者のうち承諾書提出者
一、六三三人（82・6％）
医師教育への承諾書提出者
一、三〇二人（65・8％）
新規入会者の承諾書提出者
一三五人（99・2％）
…解剖学実習及び研究、医師教育用の解剖体は一〇〇％充足された。

㈢ 登録会員の実態調査
会報に住所・電話などの変更がある場合は必ず事務局へ連絡するようにと掲載し、宛先不明者には同意者に連絡をとり実態調査に努めた。

二、啓発活動

㈠ 献体時に遺族として必要なことを会報で繰り返しお願いし、また保存版としての「ご家族へのお願い」の追加要請にも対応した。

㈡ 「無条件・無報酬」の理念も繰り返し訴え周知徹底をはかった。

㈢ 総会において、環境生命医学助教の鈴木崇根先生より献体の現役医師活用の実施状況を含め、「クリニカルアナトミー（臨床解剖）ラボの歩み」・「ご遺体からの感染を防ぐ取り組みについて」を講演して頂いた。

三、会報発行

㈠ 二十四年度より年一回となった会報第三十六号を十二月に発行した。

㈡ 第三十六号では学生感想文に加え、総会に講演していただいた鈴木崇根先生の「クリニカルアナトミー（臨床解剖）ラボの歩み」「ご遺体からの感染を防ぐ取り組みについて」を掲載した。

四、大学との連携強化

㈠ 「総会（六月開催）の運営」及び「会報発行」について、大幅に大学側に担当して頂いた。

㈡ 現役医師への献体活用教育（CAL）では四〇〇名の医師が参加し、大きな成果を挙げ得た。

㈢ 解剖学実習直前のガイダンスにおいて白菊会役員の献体動機の披瀝とともに、実習後には学生たちとの懇談会を実施した。

㈣ 大学主催の第八十八回解剖慰霊祭・遺骨返還式に、多くの会員と共に参加した。

㈤ 千葉白菊会設立五十周年記念事業について具体的な準備を行った。

五、主な行事など

㈠ 四月十三日　解剖学実習（三年生）開講日ガイダンスにて役員出席、献体動機など披瀝

㈡ 六月二十六日　解剖学実習後の学生（三年生）との懇親・激励会

㈢ 六月三十日　第三十四回千葉白菊会総会開催、名簿奉納

㈣ 十月二十四日　大学主催の第八十八回解剖慰霊祭・遺骨返還式参列

㈤ 十一月四日　解剖学実習（二年生）開講日ガイダンスにて役員出席、献体動機など披瀝

㈥ 十二月二十一日　会報第三十六号発行

㈦ 二月十九日　解剖学実習後の学生（二年生）との懇親・激励会

㈧ 平成二十八年三月二十六日～二十七日　篤志解剖全国連合会の団体部会研修会・年次総会出席

尚、役員会は四月十三日、平成二十八年三月二日の二回、その他諸種の打合せ会議を数回実施。

平成27年度一般会計収支決算書

収入の部　　（単位：円）

項　　目	予算額	決算額	増減	備考
1．謝金				
(1)千葉大学医学部	900,000	900,000	0	
2．補助金				
(1)千葉大学医学部ゐのはな同窓会	200,000	200,000	0	
(2)千葉大学医学部後援会	200,000	200,000	0	
(3)一般財団法人同仁会	200,000	200,000	0	
(4)千葉県	90,000	90,000	0	
(5)千葉市	90,000	90,000	0	
(6)千葉県医師会	100,000	100,000	0	
3．特別会計(寄付金)より組入	1,192,000	574,424	△ 617,576	
4．雑収入	10,000	200	△ 9,800	
合計	2,982,000	2,354,624	△ 627,376	

支出の部

項　　目	予算額	決算額	増減	備考
1．総会費	410,000	293,408	△ 116,592	6月30日開催
2．慰霊祭費	215,000	202,076	△ 12,924	
3．顕彰費	227,000	216,500	△ 10,500	
4．懇談会費	140,000	128,628	△ 11,372	6月26日、2月19日開催
5．通信費	320,000	291,264	△ 28,736	
6．印刷費	735,000	624,402	△ 110,598	会報12月発行
7．会議費	25,000	15,155	△ 9,845	
8．実費弁償費	180,000	117,500	△ 62,500	
9．交通費	130,000	109,990	△ 20,010	
10．消耗品費	10,000	6,822	△ 3,178	
11．会費等	260,000	260,000	0	
12．総会・研修会参加費	200,000	48,380	△ 151,620	福島県立医科大学2名参加
13．雑費	30,000	10,499	△ 19,501	
14．予備費	100,000	30,000	△ 70,000	
合計	2,982,000	2,354,624	△ 627,376	

次年度へ繰越　0

平成27年度 特別会計（寄付金）収支決算書

収入の部　（単位：円）

項　目	予算額	決算額	増減	備考
前年度繰越金	1,731,457	1,731,457	0	
1．寄付金	300,000	559,340	259,340	
2．特別事業積立金振替	0	0	0	
合計	2,031,457	2,290,797	259,340	

支出の部

項　目	予算額	決算額	増減	備考
1．一般会計振替	1,192,000	574,424	△ 617,576	
2．特別事業積立金繰入	0	0	0	50周年記念事業にむけて
3．予備費	839,457	0		
合計	2,031,457	574,424	△ 1,457,033	
		次年度へ繰越	1,716,373	

特別事業積立金報告

(1)	期首残額	7,433,963
(2)	当期利息	1,557
(3)	新規積立	0
(4)	期末残額	7,435,520

平成27年度の予算額、決算額に関する帳簿および関係書類を監査した結果正確であることを認めます。

平成28年４月６日

監事　土岐康二

監事　中島智恵

お詫びと訂正

去る平成28年６月28日に行われました第35回千葉白菊会総会で提示しました、平成27年度特別会計（寄付金）収支決算書及び平成28年度特別会計（寄付金）収支予算書（案）において誤りがありました。誠に申し訳なくここに深くお詫び申し上げ、本会報記載の通り訂正させて頂きます。

平成二十八年度事業計画

平成二十八年四月一日

一、献体登録業務

㈠ 献体の理念の理解度や親族の同意などをよくチェックし、登録業務を積極的に実施する。

㈡ 献体の現役医師への教育・研究についての利用承諾書の一〇〇％取得を目指す。

㈢ 会員の変更届や返信状況などを通して、登録会員の状況把握を引続き実施する。

二、広報・啓発活動

㈠ 献体募集の広報活動を、会員のご協力のもと積極的に展開する。

㈡ 献体登録者には「いざと言う時の備え」について周知徹底を図ると共に、ご家族の対応や死亡原因によっては、ご遺体の引取りが出来ない場合もあることを説明する。

㈢ 「無条件・無報酬」の理念についても、繰り返し訴求していく。

三、総会及び五十周年記念行事の開催

㈠ 平成二十八年六月二十八日（火）午後に、ゐのはな記念講堂にて行う。第三十五回総会に引き続き、設立五十周年記念式典と記念講演を行う。

㈡ 解剖実習室へ五十周年記念として設備の贈呈を行う。

㈢ 最後に献体の碑への成願者芳名奉納式を行う。

四、会報の発行

㈠ 十二月下旬に、五十周年記念号を発行する。

㈡ 会報には、五十周年記念に相応しい内容を盛り込む。

㈢ 通常の報告記事などは、できる限り簡略化をはかる。

五、大学との連携

㈠ 千葉白菊会設立五十周年（平成二十八年）事業については、千葉大学医学部の後援のもと、大学との連携を一層強化し一体となった運営を心掛ける。

㈡ 役員会に大学医学部事務部の同席を常にお願いし、また必要に応じて大学関係部署との打合せ会を開き、大学との連携の質と量の向上を図る。

㈢ 解剖実習前ガイダンスに出席し献体動機の発表など、大学からの要請には積極的に参加する。また、実習修了後の学生との懇談（激励）を通じて、高齢者としての希望を含め、アドバイスにも努める。

六、主な行事予定

㈠ 六月二十八日　第三十五回千葉白菊会総会、五十周年記念式典・記念講演など

㈡ 八月二十二日　マスターコース解剖実習ガイダンス

㈢ 十月八日　大学主催慰霊祭・ご遺骨返還式

㈣ 十二月二十一日　会報三十七号を五十周年記念号として発行

㈤ 平成二十九年三月下旬　篤志解剖全国連合会の団体部会研修会・年次総会

この他、役員会、会報編集会議、五十周年関連会合など年数回実施予定

平成28年度一般会計収支予算書

収入の部　（単位：円）

項　目	予算額	備　考
1．謝金		
(1)千葉大学医学部	900,000	
2．補助金		
(1)千葉大学医学部ゐのはな同窓会	200,000	
(2)千葉大学医学部後援会	200,000	
(3)一般財団法人同仁会	200,000	
(4)千葉県	90,000	
(5)千葉市	90,000	
(6)千葉県医師会	100,000	
3．雑収入	10,000	
4．特別会計(寄付金)より組入	1,025,000	
合計	2,815,000	

支出の部

項　目	予算額	備　考
1．総会費	220,000	記念品、講演料は特別会計より支出
2．慰霊祭費	220,000	
3．顕彰費	230,000	
4．懇談会費	70,000	学生との懇談会実施
5．通信費	320,000	会報、総会案内送付含む
6．印刷費	730,000	
7．会議費	25,000	
8．実費弁償費	240,000	
9．交通費	160,000	
10．消耗品費	10,000	
11．会費等	260,000	
12．総会・研修会参加費	200,000	３名出席予定
13．雑費	30,000	
14．予備費	100,000	
合計	2,815,000	

平成28年度 特別会計（寄付金）収支予算書

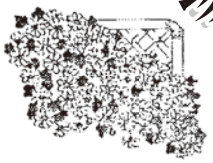
収入の部　（単位：円）

項　目	予算額	備　考
前年度繰越金	1,716,373	
1．寄付金	300,000	
2．特別事業積立金振替	6,500,000	
合計	8,516,373	

支出の部

項　目	予算額	備　考
1．一般会計振替	1,025,000	
2．50周年記念　寄贈品	5,000,000	
3．50周年記念式典事業費	1,700,000	
4．予備費	791,373	
合計	8,516,373	

白菊の広場



私と献体

最近起こった二つのことから

千葉市若葉区　**真野　美晴**

今まで、アイバンク、臓器バンク、献体に関心を持ちながらなかなか踏み出せずにいました。しかし、最近起こった二つのことで献体の決心をしました。

そのひとつは最近話題の手術ミスによる医療事故の多発です。「未熟なお医者さんが多いの？」「なぜ？」との思いがあり、私の体でも医学生や医師の教育研究に役に立つものであれば、役に立ててほしいと思ったことです。

もうひとつは今年の三月末、一人暮らしで認知症の義姉が突然亡くなり、その義姉が元気な時に献体登録をしていたことが分かり大学医学部へ送り出しました。その義姉の生き方に背中を押され、家族とも話し合い献体を決めました。

患者が心から信頼して自分の命を預けられる、そのようなお医者さんを育てることに、私も参加できるのだと思えて来ました。死の先にある希望です。

世の中に何か恩返しを

香取市　**上原　幸子**

私は先天性弱視という、生まれつき視力が弱く生まれました。昔は、そういう人に対する偏見がたいへん強く、父は先生の説得にも耳をかさず、盲学校に行くことを許しませんでした。なので私は健常者の中で学び、就職もしました。

六十五歳になった今、思うこと、それは世の中の私に係わってくれた大勢の方々への感謝の気持ち、そして、世の中に何か恩返しがしたい。しかし、目の悪い私に出来ることはあまりに少なすぎます。微力な私でも献体なら出来るかもしれないと思いました。私の思いを夫と娘二人に伝えると賛成してくれました。この書類で手続きが終わり、献体の希望が叶う日を楽しみに、これからの日々を大事に送りたいと思います。

会員からのお便り

船橋市　**眞瀬　次代**

大変に御無沙汰致してしまいました。白菊会様に入会出来ましたことはこれ以上の幸せなことはありません。本当に嬉しく身に余る悦びと感謝で一ぱいでございます。白菊会様から会報をお送り下さいまして本当にありがたく、何度も々々も読み返し乍ら学生様達の美しくも暖かいお心に共に涙して、心暖かくなり、私如きものに迄、社会の皆々様と同じに受け入れて下さり、本当に心から感謝を致しております。

一人ポッチとは本当につまらないです。現在は施設でお世話になりながら、共に暮らしている老人達、家族と離れて一人になった人々、寂しいのではないか等と人様のことを考える私です。

現在では、社会的に改まった事も出来ず、せず、本当に私は世間知らずでございました。昨年私米寿にて市から祝金を戴きました。そして又今年は国から給付金なる金子を戴けました。常々考えていましたことが今の度かなえられるのではないか…　出来なかったことが…できる

設立五十周年記念式典ご来賓の（現 国際医療福祉大学教授）松野義晴先生は、永年千葉大学で献体実務を担当されておられました。その時のご経験から「会員から家族に知らせておいて欲しいこんな事」を教えていただきました。

ご遺体をお迎えの際にご留意いただきたいこと

前千葉白菊会副会長（国際医療福祉大学教授）　松野　義晴

千葉白菊会会員の方がご逝去された際に、個人宅・斎場・病院・介護施設等々へご遺体をお迎えに伺ったときの十数年前の記憶をもとに、思うが儘記させていただきます。

第一に、ご遺族の中には、故人愛用の品を棺に納めたいお気持ちから、金属製のご愛用品をお選びいただいている方も見られます。しかしながら、金属製の愛用品を棺に納めることはお断りしています。悲しみの中でご遺族がお選びいただいた愛用品をお断りするのは申し訳ありませんので、予めご家族の皆様に金属製の愛用品については、お預かりできないことを申し添え願います。

また、ご自宅にご遺体をお迎えに伺った際に、ご遺族の皆様にもお手数をかけさせてしまうことがまれにございます。これは、ご自宅での出棺の際のお棺の動線（自宅内から自宅外への道筋）とお棺の大きさとの空間認識が難しいことが由来します。大学が準備した棺を利用しご自宅内から出棺する際、お棺が長方体（箱型：縦190、幅60、高さ40㎝前後）であるため、お棺の動線にお荷物などがあるときには移動をお願いすることもありますことも、ご家族の皆さまにご周知いただければ幸いです。なお、集合住宅等の階段等の使用については、お知らせいただければ状況により対応を講じることも可能です。

会員の皆様には、常日頃より本会からのお願い等の内容をご家族、お知り合いの方に周知いただきたくお願い申し上げます。

ことになるなんて不思議で不思議でなりませんでした。

白菊会様に感謝のお礼が出来るのでした。

（中略）

皆々様気候不順にて御身ご自愛のほど

印旛郡　**山本とみ子**

しばらくで御座います。何時も何かとお世話になりありがとうございます。

献体手帳は十五日頂きました。ありがとうございました。私はメモ用にたいへん楽しんでおります。出来たら続けて頂きたいと思っております。

私も九十六才、明日逝くかもしれません。足が歩けないので全く外を歩くのが出来ません。やせっぽちのお婆さんですが、「ぜいたく言うな　楽しく生きろ」と優しい息子に言われ、満足な日々を、けんかレクリエーションで息子と二人の生活を過ごせております。

百才近く迄行くともう、人間何も自由がききませんネ。でもここ迄世話する人もたいへんだナ。

親切な息子に感謝しつつ、日々ひなたボッコで満足しております。

会員の皆様と、諸先生方の健康をお祈りいたします。

事務局からのお知らせ

事務局職員の交代

四年間務めた堀切 慈事務局長が三月末で退職し、後任の島本恭子事務局長もご家庭の事情で七月末に退職しました。十月一日から山﨑昭子事務局長が白菊会の事務を担当することになりました。どうぞよろしくお願いします。

総会のご案内

第三十六回総会を左記により開催いたします。

記

日時　平成二十九年六月十日（土）
　午前十時～

会場　千葉大学看護学部講義室

＊来年度より、当日午後に千葉大学医学部慰霊祭を開催いたします。
　会員の皆様へのご案内は、平成二十九年三月上旬ごろ、改めてお送りします。

住所・電話番号を変更された方へ

＊ **千葉県内での転居、電話番号の変更**は必ず郵便（葉書・手紙）でお知らせ下さい。文書での連絡が届きましたら変更手続きをいたします。

＊ **千葉県外へ転居**した場合、原則として千葉白菊会は退会となります。
　お手数ですが、県外に転居されたことを事務局までお知らせ下さい。転居先でも献体登録を希望される方には、転居先の献体登録団体をご案内しております。

編集後記

五十周年記念号ということで、製本して皆様にお届けすることになりました。今回は昔のように役員が中心となって作成しました。

○ 大手出版社出身の野村烈男理事に編集長をお引き受け頂いて、素晴らしい記念号をお届けできることを感謝しています。（大澤）

○ 未来・将来へ歩む命は「成願」によって、新たな貢献へと出発する・・と五十年に及ぶ〝献体の歴史〟の節目に立ち、想いを強く、願いを強く自生する。（鈴木）

○ 寒くなりました。設立五十周年の年がまもなく終わろうとしています。皆様　よいお年をお迎えください。（宇佐美）

○ 編集は原稿用紙と割付用紙を使った昔の方法しか知らず、今回のパソコンを使った早い編集にはびっくりしました。（酒井）

○ 変わりゆく季節の中、気象の異常を感じる秋でした。記念式典・ガイダンス等では今までにない緊張と感動を頂きました。（水野）

○ 医学生の心のこもった感想文を生原稿でたっぷり読めて、幸せでした。紙面の都合で掲載できなかった方にはゴメンなさい。（野村）

○ 記念式典や学生さんの様子、緑豊かな学内などをカラーでご覧頂くのは初めてです。皆様の感想が気になるところです。（青柳）

千葉白菊会会報第37号（通巻53号）
平成28年12月21日発行

発行人　大澤國昭
発行所　篤志献体運動団体　千葉白菊会
〒260－8670
千葉市中央区亥鼻1－8－1
千葉大学医学部内
TEL 043－222－7171（内線 5023）
印刷所　三陽メディア株式会社　千葉営業所
〒260－0824
千葉市中央区浜野町1397
TEL　043－266－8437

千葉白菊会会員のご家族の方々へ

献体の実行について　－千葉大学医学部からのお願い－

千葉白菊会会員の方がお亡くなりになった場合、通夜・告別式・大学からのお迎えの日取り等をご遺族の皆様でお決めになったうえで、千葉大学医学部に電話にてご一報ください。

なお、千葉白菊会への連絡は必要ありません。

１．大学への電話連絡　０４３－２２２－７１７１（代表）

電話交換手に「献体登録者が亡くなりましたので、献体を行います」とお伝えください。

担当者におつなぎしますので、献体の日取り等についてお知らせください。

〇平日（午前８時30分から午後５時15分）

医学部の職員（内線５０１７番）が対応します。

〇上記以外の夜間、土日祝日の場合

職員の勤務時間外は警備員が対応するようになっています。

２．お知らせいただく内容

ご遺体を大学へお渡しいただく日時・場所・大学からのお棺持参の要否などについてお知らせください。その他ご不明な点はここでお問合せください。

お迎えには大学から委託された葬儀社の者と大学職員が参りますが、夜間・土・日・祝日にうかがう場合は、原則として大学職員は同行いたしませんのであらかじめご了承ください。

３．お迎えまでにご用意いただく書類

①埋火葬許可証……市町村役場に医師の死亡診断書を添えて「死亡届」を提出すると交付されます。
その際、**火葬場所は「千葉市斎場」とご記入ください。**

②死亡診断書の写し……医師の死亡診断書をコピーしておいてください。

③解剖に関する遺族の承諾書……大学からお迎えにうかがう際に職員が持参しますので、その場でご署名・捺印をお願いします。お迎えに大学職員が同行しない場合は後ほど郵送いたしますので、ご署名・捺印のうえご返送ください。

注意事項

※　亡くなられてからお迎えまで数日間あく場合は、ご遺体が傷まないようご配慮ください。お棺にドライアイスを入れる場合は、直接ご遺体に触れないようお棺の四隅に入れてください。

※　事故死（交通事故、れき死、水死等）や自殺の場合は献体できません。その他、お体の状態により保管のための処置が困難な場合にも、献体できないことがあります。

ご不明の点がありましたら、医学部担当者にお問合せください。
（043-222-7171　内線5017）

アイバンクにも登録されている場合

※　登録者が亡くなられた際には、なるべく早く、まずアイバンク協会にご連絡ください。

平日０４３－２２２－６８０３、夜間休日０４３－２２２－７１７１　内線６６１６

その際、アイバンク協会に献体登録者であることを合わせてお伝えください。

（献体登録者はアイバンクへの提供は片目だけになります。）

その他、アイバンクに関する詳細は、アイバンク協会にお問合せください。

アイバンク協会への連絡後、あらためて大学へ献体の電話連絡をお願いいたします。

千葉白菊会事務局

〒260-8670
千葉市中央区亥鼻 1-8-1 千葉大学医学部内
TEL 043-222-7171（内線 5023）
FAX 043-226-2005